始

690

山川秀峰筆

特232
2

讀切小說

吉川英治自選集

輝文堂版

目次

左久良東雄……一
玉堂琴士……四〇
飢ゑたる彰義隊……五六
大藏經開眼……一三八
雪のあした……二一〇
鬼……二六七

裝幀　池上秀畝
口繪　山川秀峰

左久良東雄

一　夜學机

『良哉さま。どうかなすつたかの？』

彼を訪ふ人は、訝つて訊ねた。

良哉は、首を振つた。

『べつに何うもせんが……』

そして、やはり膝を抱へたまゝ、寺の縁側から、筑波の上の白い雲を見てゐた。

『何うもせんことは御座るまいが。征日、いつ訪ろうても、默つて空ばかり見ておいでなさるで』

『これは病ぢやげな』

『それ御覽じ――。いつたい何處がおわるいのか。樂を攝らねば癒らぬことになりませうぞ』

『さうだ』

良哉は、客の言葉が、初めて氣に入つたやうに、大きく頷いたが、

『その病氣といふは、御國の患ひなので、どうもならんのだ。……噫どうもならん』

と、その國の惱みを身に病むやうに、抱へてゐる膝頭に、額をつけて俯向いてしまつた。

ふと、客がのぞくと、良哉は落涙してゐる。

客は、驚いて、寺を辭すと、

『變だよ、この頃は。――善應寺の良哉和尚のことさ。陽氣のせゐか、ちと氣が狂しう見えるぜ』

と、會ふ人ごとに囁いた。

二

つい五、六年前の天保の大飢饉の時には、師の康哉から讓られた藏書の數百卷も、自分が少年頃から愛讀してゐた神皇正統記も、日本書紀も、和歌の書も、殘らず賣拂つてしまつたのに、その後又、寺に少しの金でもあれば、すぐ上方の書店から新しい書物を飛脚で取寄せてゐた。

けふも三、四冊の書が届いた。

解いて見ると――

海國兵談

紅毛船火器新解

阿片戰爭始末

と云つたやうな――この山里では言葉の端にも聞いたことのない書名ばかりだつた。

さうした新版の書が手にはひると、良哉は貪るやうに讀み耽つた。そして又――善應寺の緣側でぽつねんと膝を抱へたまゝ、筑波の山を睨んでゐる――いはゆる彼の病は猶つのるのであつた。

常陸の國新治郡眞鍋村は、關東の名山といはれる筑波山麓の東にあつた。春さきから先ののどけさといつたらない。――鷄が欠してゐる。菜の花が咲く、土民の家々の壁に、桃の樹の影がくつきり映る。陽炎の國だつた。

けれど、良哉のひとみの底には、何が映つてゐるか、知る人はなかつた。

『住持といふても、まだ三十一の若僧ぢやで、密と胸を焦いてゐる女子でもあるのぢやらう。春ではあるし……』

と、云ふ人もある。

いづれにせよ、良哉は、人々の疑惑の眼の中に置かれてゐた。

三

何で僧侶になつたのか？

良哉は時々、自問自答して考へてみることがある。

僧門に入るといへば、遁世的な理由とか、後世を吊ふ爲とかが、一般的な動機であつたが、良哉の生立ちには、何らさういふ理由はなかつた。

父は、飯島平藏といふ土着の郷士だつた。浦須村の名主を代々勤め、母と別れたのは幼少だつたが、そのほかに、家庭的な原因もない。

唯。かうなつた動機を強ひて考へ出せば、それは先師康哉の學問を慕つたからであつた。康哉は國典に精しく、大義名文をはつきり持つてゐた思想家であつた。

良哉が二十歳の時、師の康哉にゆるされて、彼は京師の間に遊學し、長谷寺に入つてひたすら修行してゐた。——その後、數年を經て、歸郷するとまもなく、師の康哉は不歸の客となつた。

死ぬ時、

『わしは死んでも、おまへは、何も悲しむことはない。古人は皆、そなたの師ぢや』

と云つて、生涯の藏書數百卷を、良哉に遺物としてくれた。

だが、その書を、良哉はみな賣拂つてしまつた。數年前の天保の大飢饉の時、無數の飢ゑたる人たちを見るに忍びないで、金に換へて、救濟に當てたのである。

もうその頃、良哉には、書物はいらなかつた。胸中に萬卷の書氣が積もつてゐたからである。そして精神の底に、珠のごとき結晶が殘つた。『勤皇』——この日本への自覺であつた。歪められたまゝの德川政治下の國土から、眞の國體、

天皇の日本

を自覺したことであつた。

さう氣づいて時勢をながめると、わが住む佛敎の世界も、武士の在る武士道の道も、學問も文藝も、あらゆるものが皆、德川家中心の封建の爲にあつて、天皇の日本であることを數百年間も忘失して來たかのやうな觀があつた。

しかも、その日本は今、漸く西歐諸國から黑船の來訪をうけて、英、佛、米などの虎視眈々な野望の眼に窺はれてゐた。

そのいゝ實例に、支那があつた。

支那は開港を迫られ、阿片を賣つけられ、國民の大半が、その害毒に醉はされた。支那の爲政者は、その大害に驚いて、國から阿片を追ひ、阿片を燒き、英國の阿片商人に、門を閉ざした。英佛國の東洋艦隊は、期到れりと、支那を蹂躙した。南京城下にまで迫つて城下の盟を取つた。そして、香港を奪つた、上海を奪つた。あらゆる英佛の權利を、東洋の一角で振舞つた。

支那に味をしめた西洋諸國は、その手で日本の沿岸に近づきかけて來た。怖しい魔手で、對馬長崎、そして浦賀灣にまで近づいてゐる此頃だつた。

幕府は、幕府の存亡のみしか考へてゐないのである。日本を支那のごとくにもしかねない脆弱さであつた。內部の腐つてゐる實狀が、時局の事々に、暴露され出した。

——危いかな日本。

長れ多くも、朝廷には、この時勢に御宸襟を惱まされ給ふと一方ではなかつたが、武力、政治、あらゆる機構の實權は、幕府の左右するところであつた。朝廷にその力のない日本だつた。しかも幕府は饒ゑてゐる。外夷が沿海を窺ふには、實に、絕好な弱體組織になつたのだ。

（わしの病といふのは、御國の患ちやよ）

と、良哉の云つたのは、その憂ひに他ならなかつた。

（これを憂へずに居られようか）

と、彼は人知れず、國の患を、身に病むのであつた。

若葉が萠え初める。胸の憂はいよいよつのる。——が然し、卯の花は靜かに白かつた。遠い靑田では、のどかな田植歌がながれてゐる。

『噫……何も知らない赤子たち』

良哉は、眼に涙さへうかべた。——誰かその時、這入つて來た。近くに住む百姓の芳次郎の妹だつた。田植姿のまゝ、野良から來たので泥の足をしてゐたが、垣の白い卯の花に汗ばんだ面が田植笠の下につやつや燿いて、かへつて何日もより美しく見えた。

『あ、お菅さんか』

『良哉さま、兄が心配して、わたしに一走り行つて來いといふので、田から急いで脫けて參りました』

『心配して？——はて、何がぢや』

『いつも皆の集まるお藏の中の、各々の机や、書物などを、急いで屋根裏へでも上げて、片づけ

て遣くやうにと』

『そんな事せいでもよいに。――一體、何事が起つたのぢや』

『今――野支度の役人衆やら、殿様の御駕やらが、この善應寺へ、お越しになる途中ださうで、村境でお休み中でござります』

『それが、何うしたのか』

『……ですから、兄が、申しますには、ひよつとして、庫裏の戸でも開いてゐて、各々の夜學机や書物などが、役人衆の眼にふれるとたいへんだから、取片づけておくやうにと……』

『何を云ふ』

と、良哉は、きつとなつて、

『わしは、この日の本の天が下に働いてござる百姓衆に、この國に生れた幸を敎へてこそ居れ、人に知られて恥づるやうな學問は敎へてゐない。……お菅さんの兄は、そんなつもりで夜毎、わしの敎へを聽いて御座つたのか』

『でも……でも世間の衆は、内密にしたがよいと皆申しまする』

『案じなさるな。……誰がこの寺へ參らうとも』

さう云つてゐる間に、寺内の表の方には、野支度の侍たちが、どや〳〵と山門を這入つて來たらしい。

そして本堂の前から頻りと訪れてゐた。

一　穗の燈

一

この山間の田舍寺は、何ら伽藍の結構はなかつたが、たゞ風光には惠まれてゐた。で稀々、風雅な杖を曳く人や、旅の俳諧師などが訪れることはあるが、かういふ夥しい人馬を運れた侍たちの行裝が、門前に停まつたことは、この寺始まつて以來の事だつた。

『わたくしが住持の良哉にございますが、何か御用でございませうか』

『そちが住職とか？――』侍たちは、彼の若いのにちよつと眼を瞠つたが、

『然らば申しつける。われわれは土浦の御城主、土屋能登守様の家中であるが、唯今これへ、能登守様がお越しあつて、黄昏れ頃まで御酒宴がてら御休息あるに依つて、至急、本堂を取片づけて、お褥を設けおくやうに』

と、云つた。

良哉は、やゝ暫く默つたまゝ、侍たちの權柄な姿を見まはしてゐたが、

『せつかくのお越しには御座りますが、本堂には、稀ではございますが、父母の忌とか、子の命日とか、或は毎日の祈念に、詣づる人々がございます故、そこをお遊興の席にいたすわけには參りませぬ』

『では、客間にても、方丈にてもさしつかへない』

『いつたい、今日のお出ましは、何事のお催しでございますか』

『突然なお觸れ出しで、百姓共の田植歌をお聞き遊ばしながら、野趣を掬して、變つた御酒興をなさらうといふ殿のお望み。――それには、當寺は風光もよし、田の眺めもよからうとあつて、わざ〳〵御駕を向けられたのぢや。滅多にない光榮と存ずるがよい』

『お斷りいたしまする』

『何』

『百姓たちの田植歌をさかなに、御酒を過さうなどといふ不量見な領主に、席をお貸しいたすわけには參りませぬ』

『だまれつ。土浦五萬石の領土の田は、みな御城主のもの。どこで御酒を酌まれてはわるいの、田植歌を聽いては良くないのといふことがあらうか』

『あなた樣方こそ、勿體ない暴言を吐かれまする。だまりなされ』

『暴言だと』

『さうです』

『この賣僧つ』

と、一人は笠を拋つて、刀の柄へ肱を張つた。

二

『ま。待て、待てつ』

と、他の侍が押止めて、

『良哉とやら。聞き捨て難い今の言葉。何でわれわれの申すことが、勿體ない暴言か。もう一言、はつきりと申せ。その次第に依つては、免しおかぬぞ』

と、眉を正して、詰め寄つた。

良哉も、板敷へ坐り直した。

『されば、領土の田は、御城主のものと仰せられました故――』

『さうではないか！　將軍家より賜はつた采地なれば』

『ちがひまする。一勺の大地といへど、この日の本に於ては、　天皇のもの。將軍家や城主は、その守護人に過ぎませぬ』

『……』

『又、百姓たちも、上代には、　天皇の大御寶とさへいはれました。今も百姓あつての御領主ではございませぬか。事もあらうに、その百姓衆が、粒々泥土の中に働いてゐる姿を見物し、田植歌をさかなに、酒を酌まうなどといふお心根は、餘りにも冥加を知らぬ不所存。――それ故、勿體ない暴言と申しあげました』

さう云つて、良哉は、怯みもせぬ面で、きつと侍たちを見すゑてゐた。

すると誰か、その言葉を、城主の駕へ告げたとみえ、急に、お模樣更へになつたと言つて、ばらばら歸つてしまつた。

その噂が、廻て四隣に聞えると、

（善應寺の若い和尚は、城主に門前拂ひをくはせたさうだな）

（あれは、凡の坊主ではない、なかなか硬骨漢だ）

（わけて國典に詳しい勤皇家ださうな）

などと彼の名は、心ある人々の中に、强く植ゑつけられた。

同時に、土浦藩は、彼を注意人物として、特殊な眼で見るやうになつた。」

三

土藏の中に、二十脚ばかりの手習机が積んであつた。夜になると、村の青年たちが集まつて來て、各々それを竝べ、良哉から國典の講義を聽くのだつた。

深泥亦國恩

と良哉の書いた額が壁に懸つてゐた。そして細い暗い一穗の燈の下に、こゝでは鑑問・田に働いてゐる青年たちが、正しい日本の相を考へ、國史を讀み、そして今の日本の沿海に襲ひつゝある外寇の危機を憂へてゐた。

その風を慕つて、良哉の住居には、百姓の青年たちばかりでなく、水戸の櫻任藏、會津藩士

どの志士を初め、僧如蓮、大久保要、島男也、長島二左衛兄弟などの、密かに王政復古を理想し、攘夷討幕の大志を抱く輩が、往來するやうになつて來た。

或日、

『おいでか』

と、水戸藩の奥醫師、鈴木玄兆が、ひとりの武家を連れて訪れた。玄兆と良哉とは、前から親しかつたが、もう一名の頑丈な老武士とは初對面だつた。

『――藤田東湖先生ぢや』

と、玄兆は紹介した。

東湖と聞いて、良哉も戀人に會つたやうに欣んだ。初めてではあつたが胸襟をひらいて、半日餘りも話し合つた。

その後で、東湖は膝を改めて、あなたのやうな大志を抱いてゐる者が、僧門にかくれてゐたのでは、志は行へないではないか、不肖ながら、我藩は大日本史の編纂を成し遂げたほど、代々勤皇の淵叢となつてをる。僧衣を脱いで、武士に返るお心はないか』

さう云つて、東湖はまづ、良哉の心を叩いてみながら、

『――もし、武士に返るお心がおありならば、不肖それがしが、主君に御推擧申しあげるが』

と、追け加へた。

東湖の來訪は、すでに主君烈公の内命であつたかもしれない。玄兆も熱心に側からすゝめた。

すると良哉は莞爾と笑つて、

『いやせつかく御芳志は有難うござるが、私にはもう主といたゞく御方がありますでな、その儀はお斷り申すほかはない』

と、はつきり答へた。

意外だつた顔をして、東湖は、

『さてはもう、烱眼の士が、他藩へおとりもちしてしまうたか。殘念でござつた。して御仕官先は、いづれの御藩であられるか』

すると良哉は、儼然と坐り直した。そして心もち頭をさげ、遠い彼方を伏し拜むやうに、

『申すも畏れ多いことですが、京都に在します　天皇のほか二心を抱く主はありませぬ』

と、云つた。

東湖も、はつとしたやうに、彼のすゞやかな眸から思はず眼を伏せた。

蟬脱

一

大洋の風がそよ吹く磯濱港の一端に、大反射爐が築かれた。

寺院の鐘さへ鑄つぶされて、國防の大砲になつた。烈公の下に、時代を呼吸してゐる水戸藩の志士たちは、毎日、調練演武に怠りもない。

浪士が集まつた。剛腹な烈公は、風を望んで來る者はみな養つた。そして天下の危急に備へてゐた。

弘化元年の初夏である。

颯如、烈公に幕命が下つた。出府すべしとあるのである。七ケ條の御不審に對して、幕府の審議があるのだといふ噂がひろまつた。

水戸の城下は騷いだ。

『御主君の出府心もとない』

といふ憂ひが、暗澹と侍町の屋敷々々をつゝんだ。主君に從ひて出府する者も、殘る人々も、

共に悲壯な決意を固めた。

烈公出府！

の沙汰は、水戸ばかりでなく天下を震撼させた。幕府は野の虎を呼びよせて、是を檻に幽閉してしまふ考へらしいといふ事は、諸侯にも、天下の人心にも、明らかに讀めてゐたからである。

參府の行列は、決死隊に等しかつた。肅々と土浦の城下にかゝつた時である。路傍に立つて烈公の駕籠の前途に――幸あれ、つゝがなかれ、と數珠を掌に、半眼になつて祈念してゐた一僧があつた。

『オ……良哉さん』

主君の駕わきに從いてゐた藤田東湖が歩みながら感謝の眼を向けた。――と、駕籠の中から主君の言葉があつたらしい。東湖は列を拔けて來て、

『良哉どの。よそながら御主君にも、貴僧のお見送りをうけられてお歡びでござるぞ』

と、告げた。

東湖は病み上りであつたが、主家の大事と、病を押して參府の供に加はつてゐたのだつた。その窶れの見える面を凝と見上げて、

『お身様にも此度は、御國の爲、君家の爲、一期の御奉公を……』

と、良哉は眞心をこめて云つた。そしてふと思ひ出したやうに筆を執つて持ち合せの紙へ、

君がため
いのち死ぬべき
ますらをと
なりてぞ
生けるしるしなりけり

『路傍のくちずさみ、お餞別のしるしまで』

と、示した。

東湖は、押いたゞいて、何度も口のうちに誦しながら、やがて、一

『おさらば』

と、主君の駕籠を追つて馳けだした。

城下の往來なので、その樣子は、誰も見てゐた。猜疑に充ちた眼で、射るやうに見てゐたのは、八州取締の金子直藏といふ役人だつた。

二

良哉は和歌をよく詠んだ。三十一文字の萬葉調に烈々たる胸の火をつゞつたものである。和歌の弟子も殖えて來た。夜學の土藏は狹くなつた。諸國の志士からくる文書の往來も頻繁である。――金子直藏は幕府から十手をあづかる八州取締りとして當然、

『捨てちや措かれねえ』

と、思つた。

手下をやつて、善應寺を見張らせておいた。客があれば床下に、講義をしてゐれば土藏の高窓に、不氣味な眼が絶えず光るやうになつた。

だが、良哉もそれを察して、彼等の捕繩にかゝるやうな證據は容易に與へなかつた。直藏は焦れて來た。良哉の身邊よりもこれは出入する者を追求した方が效果があると考へた。で、夜學に通ふ村の青年たちの家々の軒へ、わざと、岡つ引を嫌がらせに立たせた。

又、寺の檀家を歩かせて、布施の途を絶つたり、飛脚をつかまへて、良哉の手紙を途中で封を切つたり、あらゆる迫害を試みた。

『もういけない。村の人はわしをひきとめてくれるが、わしが止まるのは、可愛い村の衆が苦しめることになる。――それにいつまで僧門に閑を倫んでゐる時機でもない』

翌年の春だつた。ふいに良哉は、檀家中への觸れを書いて、寺男に配らせた。來る三月上旬の朝、法の庭で大火焔の修法を遂げ、供養を營むから御參詣を乞ふ――といふやうな意味のものだつた。

何の供養か、例年の例にもない事だつたが、とにかく檀徒の老若男女がかなり見えた。日頃、良哉に和歌を習んでゐる人や村の弟子たちは、當然、朝から來て、境内の中央に山のやうに松薪を積んでゐた。

三

『お聞き及びの衆は疾くごぞんじでお在さうが、當分わが國は、内には多事多端をつつみ、外に外夷の黒船の來襲をうけ、内憂外患の文字どほりな危急でござる。國の病はわしたち民草の共々な患でござる、憂ひでござる、悲しみでござる。――故に今日火焔の壇を築いて、天地の神佛の國土安泰、外夷追滅の祈禱などいたさうと存ずるのでござる。方々も一心一念をこめて、淨火にまごころの禱りを抛ち給へ。――沙門良哉、謹んでおねがひ申す』

薪のまはりに立つた群集へ向つて、良哉はさう叫んだ。

そして、高らかに、數珠をもみ、經文を誦み初めた。

薪山へそゝぎかけた油に、火は點じられた。見るまに、炎々と大きな焔が空を焦がした。

『おや？』

『いつもの良哉とは違ふ』

『おゝ、恐い顏して』

焔に顏を焦かれながら、群集は輪をひろげた。そして一そう良哉の顏に眼をあつめてゐた。

良哉は、動かなかつた。風が彼の方へうどくと、焔は彼の姿をつゝんでしまふ。――でも良哉は、動きもせず、誦經も止めなかつた。

あぶら汗に濡れてくる彼の形相は此の世の人と見えなかつた。弟子の芳次郎はそばにゐる妹のお菅に、ふと囁いた。

『ひよつとしたら……先生は死ぬつもりなのぢやないか』

お菅も先刻からさう思つてゐた。法衣の裾や袂にまで、もう焔が燃え移つてゐる。死なない迄

も、あゝしてゐたら大火傷をして倒れてしまふにちがひない。

『お師匠さまつ』

人前もわすれて、お菅は、良哉のそばへ飛びついて行つた。そして良哉の手を引つぱつて、必死に、火焔の下から師の體を遠ざけた。

『あつ、お菅かつ。……おゝ、美しいわしの戀人』

突然、良哉は、手にしてゐる經卷を、火の中へ投げ込んでしまつた。

そして、お菅を抱かうとした。

お菅はびつくりした。――あれつと悲鳴をあげて群集の中へ逃げこんだ。群集は一瞬、茫然としてゐたが、誰からともなく、

『氣が狂つた！』

『良哉さまが發狂なされた』

と、さけび合つて、動搖めいた。

良哉は白い齒を見せて笑つた。そして經壇のそばに持つて來てあつた手筥、一閑張の文庫、反古の束などを、あつ――といふ間にのこらず火中へ拋りこんだ。

『こんな物も』

次に、數珠を投げた。帶を解いて、それも投げた。最後に法衣も脱いで拋りこむと、黑い染衣は眞つ赤な一片の紅蓮になつて、火焔のうへに舞つた。

『戀人。戀人。戀人つ』

眞つ裸となつた良哉は、さう叫び〳〵山門の外へ馳け出して行つた。疾風のやうに、里の山から山へ馳け出して、

『戀人つ、戀人つ』

聲のしやゞれるまで猶云つてゐた。

四

『兄さん……わたしは淺ましうて』

と、お菅は翌る日、誰もゐない寺の中に立つて泣いた。

弟子たちの世話人として、芳次郎が一切をやつてゐたので、兄妹して後片づけに來てゐたのである。

『又泣く。……ばか、何をめそ〳〵してゐるのだ』

『でも、わたしの姿を見ると、村の衆が、良哉さんを狂はせたの、何か、をかしな仲でもあつたのだらうと、指さゝぬばかりに云つて』

『捨てゝおけ捨てゝおけ。……だが、分らないのは、人の心だなあ。あの先生が、何うしたのだらう』

『わたしにも、さつぱり理が分りません。餘り御勉强が過ぎたので』

『む。さうかもしれない。……さ、お菅、机だの何だの、お弟子衆の物を、一所へ纏めておかう』

土藏の中からそれ等の物を、二人は本堂へ持ち出してゐた。そのうちにふと、お菅が、

『兄さん……兄さん……來てごらんなさい、良哉さんのお居間に』

兄の袂を引つぱつた。

行つてみると、昨日からまだ誰も這入つた樣子のないいつもの靜かな書齋。—その花瓶に、山櫻が一枝挿けてあつた。そして床脇の短冊懸をふとみると、

事しあらば
わが大君の大御爲
ひともかくこそ
散らまほしけれ

良哉の遺した筆蹟だつた。

榊の水

一

『三中さん、三中さん』

夜半である。誰か戸を叩く者がある。

土沛の豪商で、良哉の歌道の門人、色川三中の住居の裏戸だつた。

今、寢まうとしてゐた三中は、はつと何かすぐ思ひ當つたらしく、女中が出て行かうとするのを遮つて、

『よし〳〵、わしが出てみるから、おまへはもう寢みなさい。夜も更けてゐるし——』

と、自身手燭を持つて出て行つた。

案のぢやう、戸外に佇んでゐたのは、良哉だつた。

『よくお越し下された。噂を聞いて、さては愈々と、思ひながらも、蔭ながらお案じ申してゐたところでした』

三中は、自分の一室に迎へて、何かと密やかに歡待した。

『御迷惑ぢやろが、當分の間』

『お氣づかひは無用です。――それよりは、あんなに澤山　諸國の志士と往復した手紙や何かの證據となるやうな物。それはどう始末しておいでなされましたな』

『みんな灰にして參つたから、後の心配はさらりとない。――これで目的どほり、武士に立ち返りました』

『還俗して、侍におなり遊ばしたからには御姓名も以前の――』

『いや〳〵、もの〻ふとなれば、大君の爲明日をもしれぬこの身。假の世の名は假の名がふさはしう思ふ』

『では、何とお名けなされましたか』

『姓は左久良。名は、東雄』

『おゝ、櫻の花がお好きですから、貴方樣には、ふさはしいお名まへです』

曾つて、この二人の師弟は、鹿島神社に參籠して、千株の櫻を自分の手で植ゑ、國土と皇運の萬代を祈り、又、この身命をその大御爲に捧げ奉ることを、祈誓したことがある。

東雄は、性來櫻の花が好きだつたし、その時のことをも思ひ合せて、左久良と姓を名けたのだつた。

二

十五年の歳月がそれから流れた――

左久良東雄も、もう四十の坂をこえ、今年萬延元年には、大坂の久寶寺町に住んでゐた。小やかな門標のわきには、

皇典敎授

と板札を打つてある。

家は貧しかつたが、唯、彼の好む櫻の樹が、門口にも庭にもあつた。今年も亦、吉野の雪白を移したそれが、もう散らんばかりに開いてゐた。

『輝子、どなたか、お客らしいぞ。行つてみい』

早朝だつた。

いつものやうに、東雄が井戸ばたで口を漱いで、皇居の方に、禮拜してゐた時だつた。

『はい』

妻の輝子は、四人の母だつたし、朝の家事に忙しかつたがあわてゝ玄關へ出て行つてみた。

――客の影もない。その代りに、二通の飛便が、投げこまれてあつた。

東雄は、朝日の下で、庭に立つたまゝそれを讀んだ。一通は輝子の父、水戸の藩醫鈴木玄兆からであり、もう一通は無名だつた。

『おうつ、よろこべ。輝子、輝子』

いつになく東雄は狂喜して妻を呼んだ。その二通とも、櫻田門外に大老井伊直弼の首級を揚げたといふ――同志たちからの本望達成の報せだつたのである。

『御神灯を。さうだ、御神灯を』

と、東雄はあわてゝ、榊の水を更へ、衣服を改めて、その下に坐つた。

三

頬りと、夜毎、櫻の花が散る……

乳のみ子は寢かしつけ、輝子は良人の文机から少し離れて、縫仕事をしてゐた。

隣の部屋で、日課の讀書をしてゐた長男の石丸が、やがて父母の前に來て、

『お寢みなさいませ』

と、挨拶して臥床へ退りかけた。

『待て、石丸』

筆を擱いて父の東雄は、膝を向け直した。十一歳の石丸は畏つた。

『父は侍ぢや、大君のお爲には、いつとも知れぬ待の身ぢや、そなたの心の守りに、かう認めておいた故、よく魂に刻んで暗誦しておけよ』

と、何か書いたものを與へた。

『はい』

石丸は、それを膝にひろげて、領いた。

『讀んでみい、讀めなければ、母に讀んでいたゞいて心にとめておくがよい』

輝子は取つて、子に代つて、讀んでやつた。

猫奈良八鼠能取
犬那良波能垣守理
猫止云者猫之鑑
犬止云者犬之鑑止
成而古曾命死禰

顯身之人止生多留
我輩者赤心乎
天皇邊爾極盡而
無比勳功乎立而
天地之依相之極
生嗣武人之鑑止
成而死部志

『わかつたか、石丸』

『はい。おぼえました』

『たゞ頭に覺えただけではいかぬ。魂に――血のながれの中にまで』

『きつと、忘れませぬ』

『よし。臥床へはひれ』

白い花の散る雨戸の外に――先刻から佇んでゐた二人の旅武士があつた。この二人も父子らしかつた。軒端の陰に洩る家の中の話し聲に、にこと、顏を見あはせて笑つた。

『左久良どの、左久良どの』

子息の方の武士がそつと戸を叩いた。返辭は聞えなかつたが、屋内の燈のそばから、東雄と輝子の夫婦が、靜に緣へ歩いて來た。

『高橋でござる、高橋……』

再び外で云ひかけると、

『唯今』

と、東雄はそこを開け、妻は、表や臺所の方を、見張りに行つた。

歌ふたましひ

一

雪の日、櫻田門外に、井伊大老を襲撃した烈士の中の高橋多一郎とその子藤二郎の父子は、東海道を走つて、大坂まで落ちのびて來た。そして、東雄の家を訪ねて來たのだつた。同藩の藤田東湖から、

（彼こそは、賴母しき者）

と紹介されてから、東雄と多一郎とは十年來の友だつた。

『よう來てくれた。案じてをつたぞ。さ、さ……早く上れ』

と、手を取らんばかりな東雄だつた。

だが、多一郎父子は、草鞋を解かなかつた。大事達成の後の、いろいろな打合せもあり、先に、匿れ家も作つておいたから、いづれ又悠りと會はう。たゞ一目、無事な顏を見せ、同時に君の歡んでくれる顏を見に立ち寄つたのだといふ。

『でも、まあせめて……』

と、輝子も止めたが、高橋父子は意を翻へす氣色もなく、

『石丸も無事に成人してをるか。昨年生れたといふ嬰兒も丈夫か』

などと紛らはして訊ねた。もつとも高橋は、左久良夫婦の媒人でもあつた。

『さほど仰せあるからには、お引留はいたしませぬが、何處へ落着かれるお考へか』

『生魂神社の神官、島男也どのの家へ』

『島氏なれば、氣遣ひはない。それ伺つて安心いたした。では、こゝから近うはござるが、お氣をつけて』

と、夫婦は家の外まで出て、二人の影を見送つた。

島男也は元、常陸笠間の藩士で、薩南の志士と水藩の志士との聯携を計り、幕府を覆へさうと督つてゐる滅死奉公の人だつたし又、東雄とは彼が僧門にゐた頃からの莫逆の友でもあつた。

二

毎日のやうに、東雄は、男也の家へ遊びに行つた。

その途中、或日、ばたつと顏を合せた者がゐる。

先方でも、顔を見たとたんに、おうと思はず云つて眼を瞠つた。

『まづい者に會つた……』

と、東雄は、顔を反らした。――それは以前、土浦の城下にゐた八州取締の役人金子直藏だつたのである。

この大坂では、何をしてゐるのか、直藏は振向いて、にやりと笑つた。そしてそゝくさとべつな道へ曲がつた。

『餘り訪れぬはうが、高橋どのゝお爲かも知れぬ』

と、それから東雄は、四日ほどわざと無沙汰してゐたが、やはり會ひたくなるし氣懸りもわいて、もう櫻は道に落ちて白い黄昏、ぶらりと生魂神社のそばの島男也の家を訪ねて行つた。

――そこへ近づかぬうちに、東雄は、

『や、や?』

胸をとどろかせた。

町奉行所の人間が數名、門口に突つ立つて、鋭い眼をくばつてゐるのだ。さては――と日頃、親しくしてゐる鳥居前の茶店へ走りこんで仔細を訊ねると、茶屋のおやぢが、眼をうるませて話

には、男也も高橋父子ももう二刻ほど前に、大坂東町奉行一色山城守の手の者に、召捕られて行きましたといふのであつた。

その時のもやうを猶たづねると、高橋父子の潜伏してゐるのを知つた捕手は、數十人もこの境内を取卷いたが、

(水戸侍は手きゝが多いぞ)

と、戒め合つて、ひどく大事をとつて島家をつゝんだ。

目明しの一人が先に、そつと、玄關を覗きにゆくとひとりの老武士とその子息が外出しようとして出て來たところらしく、土間で下駄の緒をすげてゐた。

で、目明しが、

(水戸のお客さんはゐらつしやいますか。へい高橋樣と仰つしやいますが)と云ふと、その侍が、下駄を穿き直して出て來ながら、

(高橋は拙者だが、何用か)

と、睨めつけた。

目明しは、膽をひやして、横飛びに逃げてしまつた。高橋父子は、もう覺つたらしく、悠々と、

捕手の氣配をながし目に見ながら、鳥居前のもう一軒の腰掛茶屋へ這入つた。そして一足の草鞋を求め、足に着けようとしてゐた所を、

（それつ！）と、捕手がなだれこんで、縛めようとした。

（騒ぐな、こゝを汚しては、茶店がかはいさう）

高橋はまう云つたさうである。見るとすでに短刀を自分の脇腹へ突き立てゝゐたので、捕手はその血相に側を離れ、彼が歩む方へぞろぞろ尾いて行つた――と、その時の様を見てゐた茶屋のおやぢは、いかにも口惜しげに、物語るのであつた。

十九歳になる子息の藤二郎も腹を切り、島男也も、それからすぐ縛られてしまつたといふ。

『……あゝせめて、御最期のおわかれを一目でも』

と、東雄は、こゝ數日訪ねなかつたことを悔い、瞑目して、道をもどつて來たが、同じやうな運命は、もうその時、彼の後からも尾けて來つゝあつたのである。

三

『――良哉さん』

金子直藏は、わざとさう呼んだ。

東雄は、答へなかつた。

二度ほど後ろで呼んだのは知つてゐたが、振向きもしなかつた。

『今歸つた』

妻の輝子は、彼のもどりが餘り早いので、不審な顏をしたが、戸表に佇んだ人影を見て、はつと、その眼を良人の顏にうつした。

君のため
明日をも知れぬものゝふの
今日は樂しく
あそぶべきなり

常々、今日生れて今日死ぬる身――。明日知れぬ身の今日の尊さ――と口ぐせに妻にも云つてゐる良人である。

輝子には、もうすべてが分つてゐた。

『子どもたちはをるか』

『皆、居りまする』

『わしの部屋に集めておけ』

その間に、彼は下着から腹帶小袖まで、すべて垢のつかないものに改めた。

瞑目して、香を上げてゐた佛壇から、赤と白の干菓子を下げて來て、それを子たちへ分け與へ、

『石丸』

と、いちばん年かさの兄に云つた。

『いつぞや、父が書いて與へた萬葉歌、もう魂に覺え入れてか？』

『え。……すつかり心に入れました』

『では、試みに、歌うてみい』

『はい』

十一歳の石丸は、畏まつて、

猫奈良八鼠能取
犬那良波能垣守廻
猫止云者猫之鑑

と愛らしい聲で歌ひだした。

『……』

輝子は、嗚咽して、それへ泣きふした。もう櫻は散つて、葉になりかけた梢が、夕陽の窓にうつすらと影を投げてゐた。

『――東雄。こんだあもう、狂人のふりをしたつてだめだぜ』

金子直藏の聲である。戸外からさう云つて嘲笑つた。

ひそやかな捕手の足音が、垣の外や、勝手口の方に、吹かれる落葉の音のやうに、すでに忍び繞つてゐた。

犬止云者犬之鑑止
成而古曾命死禰
顯身之人止牛多留
我輩者赤心平……

石丸は無心に、父の顏へじつと眼を向けたまゝ、猶、歌ひつゞけてゐた。

玉堂琴士

阿蘭陀畫師

大きな乳ぶさを垂れた斑の牝牛である。超然とした生命に秋の陽を浴びて、時々、沈湎な目ばたきをしながら、草色の唾液を口からながしてゐた。

地に垂れてゐる綱の端には、竹編の籠が結ひつけてあつた。月足らずらしい、痩せこけた嬰兒が、赤い小蒲團にくるまつて、籠の中に入れてあつた。

嬰兒は、泣きぬいてゐた。

しわがれた弱い聲であつた。まだ二つにもなるまい。泣くだけなのである。

崩れかけた海鼠塀や、澁墨の塀や、閑寂として貧しい藩士の住居が、この廣い野原をかこんでゐた。野菊のつよい香がいつぱいに蒸れてゐて、原を二つに割つてゐる岡山への道を行く人は、欠伸を催した。

泣き飽いて、いちど眠りかけた嬰兒は、また泣き出してゐる。

食慾の赴くまゝに、牝牛は、雜草を嗅いで歩くので、籠もずる〳〵と何處までも引き摺られて行つた。

芒が、眼を突いた。ひいつと、こんどのは癇がつよい。

『嬰兒の聲だ』

岡山の城下まで使にいつて戻つて來た紀一郎は、土塀の小門を潜りかけたが、

『お守は、どこへ行つたか。しようのない呑氣者』

牛のそばへ、駈けて來た。

そして、籠から嬰兒をだきあげて、

『ゆるせ。わるい奴なう』

謠を歌つてやりながら、紀一郎は、あやして歩いた。十六歳で、まだ前髪だつたが、父に似て、背が高いし、教養と環境も、はやく、彼を一個の成人にしてゐた。

『御子息。——お父上の兵右衛門樣は御在宅でゐらつしやいますか』

道に、立ちどまつて、赤穗屋喜左衛門がよびかけた。懇意な旅籠屋の主人である。

『をりまする』

紀一郎は答へたが、彼の後に立つてゐる見馴れない人物に氣づいて、

『けふは、少々、取り混んでをりますが』

と、つけ加へた。

『いや、長座はしませぬ』

後の人物は、十徳の袂から、誰かの紹介狀と、名刺をだして喜左衞門に渡した。

『岡山に參つたら、お訪ねすると、あらかじめお手紙もさし上げてあるさうで。――かういふお方でございます』

紀一郎は先に歩いた。受けとつた名刺には、司馬江漢としてある。紹介狀は、大坂の兼葭堂からの物である。どつ方も著名な人物だし、わけて、江戸の司馬江漢といへば、布地へ油で、風景人物、何でも描く、阿蘭陀畫といふのを發明して日本の墨の畫家を驚かした新知識だといふことを聞き、若い紀一郎などには、憧憬の名だつた。

『その江漢殿が、あの人かしら？』

そつと、振向いてみると、長顏、頭は、クリ〳〵坊主にしてゐた。利休茶の十徳を着、凹んだ

眼くぼに、光のある眼とやゝ傲慢な鼻ばしらを備へてゐる。喉の骨が尖つて、毛が生えてゐた。

その江漢は、寫生閥にでもとりたいやうに、牝牛を振り向いて、

『この邊の風俗では、嬰兒は、みんな籠に入れて、あゝして牛に守させておきますか』

『はゝゝ。これは、浦上樣だけでございませう。なう、御子息』

『さうです。弱い嬰兒は、牛に守をさせると丈夫になるといふ事を、父が、何處からか聞いて參つて、百姓から買ひ求めましたので』

『でも、お守役は、付けておかねばなりますまいな』

『所が、その弟めが、牛に賴つて、ちづとも、守をいたしませぬ』

『はゝゝ。弟樣なら、お陣屋川で、魚獵りをしてゐらつしやいました。遊びたい盛り、それや、牛の知らぬ顏よりも、無理のないことで』

姉の子

『爺や。……けふのは、風雅の方のお客樣ぢや。豆腐汁に、かまぼこでも切つて御酒をそへ、支度をな』

紀一郎は、勝手へ來ていひつけた。

度い臺所は、永年ゐてくれた女中が嫁いで行つた後、朴訥な爺やひとりだつた。母はとうに故人だし、姉は、仔細があつて家にゐないし、不便はあつたが、質素な浦上家の朝夕はこれで、閑にあはぬこともなかつた。

『旦那樣も、若樣も、ご心配のある所、お酒でもございますまい。赤穗屋に耳うちして、よい程に、連れ戻らせたがようございませう』

爺やは、骨惜みではなく、眞實にさういふのだつた。

『いや〳〵、司馬江漢と申されて、珍客ぢや。長崎へ、阿蘭陀畫を究めに行く途中とかいはれてゐた。お父上の名を慕はばこそ、こんな田舍へも訪ねてくださるのぢや』

『でも、若樣のお氣持。また、旦那樣にしても、それどころでは……』

『どうかならう。爺や、おまへには分るまいが、お父上には世事の風波には、崩れぬ石築がすはつてござる。……それに風雅の交友はまた別なもの。却つて、お慰めにもならう。支度してくれ』

客間からは、時々、主客の笑ひ聲がもれた。主人の浦上兵右衞門は、低聲で、言葉すくない方だつたが、江漢は多辯で、しきりと畫論や洋畫の氣焰をあげてゐるらしかつた。

酒が出て、そこの書院障子に、橙色の灯りが映すと、次男の紀二郎が、小笊に、川魚をいつぱい漁つて、誇らしげに、歸つてきた。

『爺や、お客樣がきたらう。これを、御馳走にだすといゝよねえ、兄樣』

『うむ』

紀一郎は、眠つた兒を、膝にのせて、臺所の框に腰かけてゐた。十一歲の弟の顏をみると、叱言はいへなかつたし、自分や父の今の憂ひだの、暗い世事の苦しみなどは、何も知らない弟の童心に、少しでも反對させてはならぬと思つた。

『ほんに。これや串燒にようござります』

『わしが獵つた魚ぢやといふて、お父樣とお客樣に出してくれい。いゝかい、爺や』

『はい〳〵』

兄の紀一郎は、牛を思ひだした。

『紀二郎。牛小屋へ、牛を入れておかんか』

『さうだつた』

紀二郎は、元氣よく駈けて行つた。

川魚を焼く七輪の煙いけむりが、眞つ黑な臺所から藍色の闇へゆるくあふれ出した。暮れると急に秋の風が寒かつた。紀一郎は、膝の兒を、兩袖で庇つた。

『よく似てるなあ』

疲顏に、眼を落しながら、心のなかで呟いた。

姉と、瓜二つだ。

いくら、世間ていには、父が親しい畫の友達から賴まれて預かつてゐるのだといつて置いても、世間で信じないわけである。鼻すぢがとほつて、色が白くて、そして、薄命的なさびしい眼元まで、姉そのまゝだ。

けふも、その姉の問題で、この鴨方から五里餘りほどな岡山の城下に行つて、伯父方の七郎右衞門と胸の痛い相談をして歸つて來たところである。歸ると、途端に客が來てしまつたので父に復命する遑がなく、自分の胸一つに、今つゝんでゐるのではあるが、紀一郎は、客の長座を、迷惑とは思はなかつた。

あゝして、好な畫の事や風雅の談樂をしてる間は、父も忘れてゐるだらう。その間だけは、鴨方藩の藩士浦上兵右衞門ではなく、無名の一畫かき、浦上玉堂として坐つてゐるのだ。

さう思ふと、紀一郎は、むしろ客の長座を祈つた。歸つた後、父に膝を向けていはねばならない苦痛が怖ろしかつた。

『とても、言へない……。あの父の顏を見ては、いはうとしても、言へないに決つてゐる。……でも？』

彼は、七郎伯父から、懇々と說きつけられた言葉を、もいちど、胸へ訊ねてみた。

――捕へて斬れ。

――男の方は、わしが說いて、腹を切らす。

伯父の說は、それが前提だつた。

姉を斬つて、一日もはやく、藩の重役の手元まで、姉の首と、始末書とをさし出して置くのが、この際とるべき、たつた一つの處置だといふのである。

『いへるか、そんな事が……。あの父に』

彼は、父の顏をみる前に、自分の意志から先にかためて置かねばならぬと思つた。岡山から歸る途々も、さんざん、双金のやうに、冷たく、冷たく、たゝいてきた決心ではあるが――

時を忘れてゐるやうな主客の笑ひ聲のあひだに、奥から、手が鳴つた。

『酒を――。酒がないぞ』

兵右衛門の聲である。

七 絃琴

子の不義を、故意に隱蔽した事實が發覺すれば、父も罪に問はれるのは勿論、由緒とか、譜代とかにかゝはらず、家名は、斷絶ときまつたものだ。

小を殺して、大を救へ。

さう考へるより仕方がないではないか。一人の淫奔なる娘のために、兵右衛門を死なしてはならぬ。肉親や親族までをこの上、不幸にしてならうか。家名に、泥を塗つたとか、外聞とかは、もう追ひつかない事で、問題は切羽へつまつてゐるのだ。

姉を斬れ。

お之を首にして、藩へさし出せ。

『やがてお前の斷ぐ家――浦上家は――今でこそ岡山の支藩鴨方藩の九十石どりに過ぎぬ小祿だが、紀貫之からの血すぢで、戰國前後には、和氣郡天神山の城主でもあつた舊家だ。その得難い

家名を、淫奔な娘の爲でかした不義沙汰などで、斷絶させてなるか』

常には、磊落で、酒でものむと他愛ない伯父が　けふは、蒼白になつていつたものだ。そして猶――

『お前たち父子が、肉親の情にからまれて、斬れぬといふなら、わしが斬つてやる。兵右衛門にもいふがよい。藩法を紊して、藩政が立つか。今でこそ、閑役だが、浦上兵右衛門、つい先だつて迄は、お供頭兼目付役、三十年來、その藩政をとつてきた役人ではなかつたか。當然、馬稷を斬るの涙をのまねばならん。――それを、兵右衛門、盲愛にも程がある。私生兒を手元へおいて、育てゝをるなど、言語道斷。君侯へ弓をひくも同じ沙汰ぢや』

と、つけ加へて、熱い眼をそむけてしまつた。

『申し傳へます』

戻りかけると、

『紀一郎』

玄關まで、伯父は又ついて來て、最後にと、そこでも言つた。

『おまへは長男だな』

『はい』

語氣につりこまれて答へたが、紀一郎は、胸へ、五寸釘でも打ち込まれたやうに感じた。今も、その言葉の釘が、づき〳〵と痛む。

も一度、父に說いてみて、なほ、父が肯じない場合は……。

『長男』

自分の立場をあはれむやうに、彼は、口のなかで呟いた。

『姉を斬る……。それが出來るくらゐなら』

膝に眠つてゐる嬰兒の顏をみても、とても、出來ない！　と心が先に崩れてしまふ。この嬰兒の輕さは何うだらう。生れてから、飯を炊く時に蒸きこぼれる粘汁と、米の粉とより他には舐つてゐないのである。

でも父は、この孫が、可愛くてたまらないらしい。丈夫になれと祈つて、牝牛を求めたり、世間の風評も怖れず、暇があれば、抱いて、ひよこ〳〵、外へも出る。

——お孫樣で？

と、他人が訊ねれば、うつかり、自慢でもしさうな父である。

罪の子にすらさうであるから、姉の不義が知れた時の處置も、父としては、あゝするより他になかつたであらう。——狼狽し過ぎてる、と親類の中でも慣る者はあるけれど。

それは、父としても、狼狽はしたらう。浦上家の家庭的の信念として、肉親のうちから、こんな問題をひき起す者があるなんて、姉が子を產むといふ現實に迫るまで、信じられない事だつたから。

父の耳へ入つた時は、もう七月とかで、あわてゝ、姉の身を、但馬の湯治場へかくし、產んだ子は、世間ていを繕つて、屋敷へ引き取つて育てゝゐるが、さすがに、姉は、それつきり歸つて來なかつた。

——歸れば生命がない。

さう思つてゐるか、又、

——父にも、年下の弟たちにも、終生、合せる顏がない。

と考へてゐるか。

何つ方にせよ、こゝへは、歸れない身だつた。但馬の湯へ送る時も、親類たちは、

——これ限りぢやぞ。

――二度と歸るな。五年か十年、ほとぼりでもさめぬうちは、歸つてはならぬぞ。

口々に、さう餞別したとも聞いてゐる。

所が――

產後、まだ一年とも經たない間に、その姉が、不義相手である男と、岡山の城下で、時折、逢曳してゐるといふ噂がたち始めてゐる。伯父は、本藩の臣なので、目前に、そんな風評を聞かされては、もう、居ても立つてもゐられぬらしい。

父は、それに對して、どう思慮をきめてゐるのか。それに就ては、一言も、家庭でもらした事がない。――それだけに、紀一郎は、父の氣持が察しられて、今夜、奥の客が歸つた後、どう、話したものか――話さないものか――未にわく〳〵と心がみだれて、たゞ、時間のたつのが怖かつた。――嫌でも應でも、何かの最後が、迫つてくるやうに、胸が騷いだ。

『よく、はしやぐお客ぢや』

爺やは、酒を置いて來て、つぶやいた。

風呂場へ廻つて、竈口をのぞきながら、

『紀二郎樣、遲いなう。牛と、牛小屋で寢てしまうたらやないかな……』

『腕白者、何してをるか分らぬ。見て來てくれい』

爺やは、のそ〳〵出て行つた。

客間の話し聲が、はたとやんで、急に屋内がしいんとしたので、さては、もう客は暇かと思つてゐると、さうではなかつた。

日頃、兵右衞門の嗜む七絃琴のしらべが水のやうにせゝらいできた。

比登波

妬我底登

奴我免辭――比登波

自作の譜を、ひくめに、さびた歌聲にあはせながら、彈いてゐた。

『父も、すこし醉ふてゐる』

その醉の氣もちは。

紀一郎は、じつと、耳を凍らせた。

兵右衞門は、若い頃から、廟學に興味をもつてゐた。わけて、琴を愛した。その琴を、倪雲林を敬慕して、やがて、墨と紙とに、心を、憂さを、現實の外へあそばせる娛さを知つていつか深

くなつたやうに、蒼古な、中華製の明琴を手にいれて、朝の茶に、夕方の酒興に、誰に聞かすでもなく、弾いて楽んでゐるのだつた。――長崎あたりへ舶載されて、轉々した物であらう。明の顧元昭の作で、「玉堂清韻」と、古篆の銘があつた。それから後、畫の署名には、玉堂、或は、玉堂琴士と書いた。

妻を亡くした後は、琴が、妻のやうでさへあつた。傍を離したこともないのである。お之の問題が起つてからでも、それは、變らなかつた。

『來年は五十。人間一人前の務めはなされて、これからはといふ、四十九の老の坂に……今のお苦勞……』

琴の音が止むと共に、紀一郎は、濡れてゐる自分の頬に氣がついて、そつと拭いた。

『お兄様っ』

びつくりして、彼は、頓狂な弟の顔を見つめた。紀二郎が、駈けて來たのだつた。

『牛は、入れたか』

『これから』

『まだぢや？……。一體何してゐたのか』

『あの……』

『夜まで、遊び事はならぬ。牛は、騒やがしまふであらうから、早く、お入りなさい』

『あの……お兄様。……嬰兒を、ちよつと貸して』

『なに、嬰兒を貸せ？』

『困つたなあ。……あの……嬰兒を外へ抱いて行つちや、いけないかなあ』

『夜ではないか』

『だつて……』

『妙な事をいふの。だつて……何ぢや……これっ、紀二郎、隠し事をすると、ゆるさんぞよ』

『ぢや、言はうかしら。お姉様に、ついそこで會つたの。……そしたら、お姉様が、内緒で、嬰兒を見せてくれつて頼むから』

『な、なにつ。姉上に會つた』

『えゝ』

『何、何處でッ』

寒燈

『紀一郎、紀一郎――』

父の聲だつた。

『はいつ……』

『お歸りぢや。お客様が、お歸りになる。――御挨拶をせい』

『はつ。……今、唯今參ります。……紀二郎』

弟へ、顏をよせて、低聲に、

『そなた、嬰兒を抱いてをれ。――だが、斷じて、一歩も、外へ出てはならんぞ。姉上に、會つてはならぬぞ』

『え』

『會つたら、兄は、承知せぬ。よろしいか』

硬ばつた兄の顏と、その眼の光に紀二郎は、威壓されたやうに、うなづいた。

客はもう玄關に出てゐた。赤穗屋は、提灯を點しながら、思はず長居いたしました。したが、

お二人様のお話、まつたく、時の移るも忘れましてな』

旅焦けの顏や襟を、どす赤くして、いゝ機嫌になつた江漢も、一緒になつて、

『やあ、御子息までがお見送り、痛み入る。――そのうちに、拙い蘭畫一葉、お贈りいたさう。けふは思ひがけない淸遊、いや、ちと食べ酔ふたらしい。賢を問うて歸る秋徑夜香あり、迷うて里家の灯は遠く袖露に重し。はゝゝ、それもよからう』

蹌踉と、歸つて行つた。

爺やは、いつのまにか戻つて、無言のまゝ、客間を片づけてゐた。

『琴は、わしが寄せる』

兵右衞門は、戻るとすぐ琴のそばへ坐つた。囊を寄せて、膝の上へ、琴を抱きあげ、いつものやうに、丁寧に拭きはじめた。

壯年から痩せてゐる質ではあるが、四十九の今年の坂で、めつきりと、横から見た頰骨や肩の尖りに老が目だつ。灯りのせゐもあらうが、風にも堪えないほど全身が細つてゐる。明時代の琴の古桐の上を、布巾で、靜に撫でゝゐる指先にしても、削つたやうに見える。

誰が、この肉を削つたか。

紀一郎は、ぴたと、坐つた。

『父上』

『ム？……』

兵右衛門は、顔をあげて、

『なんぢや』

眼のふちは、春風にでも弄られてゐるやうに仄紅い。眸も、温容な唇も常と變らなかつた。

『けふ、御城下へ行つて參りました。そして、伯父上にも會ひまして……』

口が渇く。

兵右衛門は、琴の嚢へ、琴を入れて、

『さうか。あそこ、皆、達者か』

『はい』

心を鞭うちながら、

『父上つ……。姉上の御處置について、伯父上からも、前日、お手紙があつたさうでございます』

『おゝ、來てをる』

『もう、一日も、半日も、のばしてはならぬと』

『はゝゝ。何ういふての』

『き……斬れと……』

『なにを』

『……』

紀一郎は、肱で顔を蔽ひながら、がばと、片手をついた。

『父上つ……それ以上のこと、何で弟の口から……。おさしづができませう』

『斬れとは、之のことか』

『お察しくださいませ』

『花鋏で、一輪、切るやうなわけにもゆくまい。わしに、まかせておけ』

『で、でも』

『……どうかなる』

包んだ琴を、そつと、脇床の小壁へ立てかけて、

『嬰兒は』

『紀二郎の手に眠つてをります』
『米の粉を搗いてやつたか』
『のませました』
『風邪をひかすなよ。めつきり、夜が寒い』
『は……』
『紀一郎、何の意味で、おまへは泣いてるか。すこし、書物を讀めよ。近頃は、夜讀の聲もせぬやうではないか。――つまらぬ事に囚はれずと、若いあひだは心の鍛へが大事だ、勉强をすることだ』
そして、立ち上りながら、
『爺。――戸を閉めい』
早寢の習慣である、兵右衛門は、寢室へ入つてしまつた。

涙　刄

兵右衛門の退いた後に坐つて、目付役になつた唐橋佐内は、時々、遊びにやつて來ては、兵右衛門の畫などをねだつてゐたが、ひよつとり、紀一郎の書生部屋の窓へ、外から顏を出して、

『御勉强か』
と、いつた。
『お。佐内樣ですか、お上りください』
文の下役であつたし、氣だてのよい、何時でも變らない人物と思ひながら、紀一郎は、すぐ顏いろが變つた。自分でも淺ましいほど猜疑がつよくなつてゐるのに氣がついた。
『いや、けふは……』佐内は首を振つて、
『あんたにだけ、そつと、告げておくが』
と、窓口へ肱をかけた。
『之どのゝ事で、たうとう、本藩からいつてきた』
『えつ、では愈々、表沙汰に』
『この鴨方の支藩には、先生をお慕ひしてをる者が多い故、まあ今日まで、薄々は知つても知らぬ顏を裝つてゐたが、岡山の方で、お之どのゝ戀の相手――成田鐵之進が、まづい事件を起してしまうた。周圍の噂に、居たゝまれず、藩廳へ、自首したものだ』

『あつ、名乘つて――』
『ム。御成敗を抑ぐと』
『い、いつですか』
『今朝の着狀だから、ゆうべと思ふが』
ゆうべとあれば――弟の紀二郎が、外で、姉に會つたといふ、その頃である。
『後は當然、お之どの丶身だ。――御當家なり、お之どの自身から、濟の手の下る前に、處置をとつて下されば、吾々も、寢さめがよいし、殿へのお取做しのしやうもあらうが』
『御猶豫は、どれほどございませうか』
『もう、無いのだ。――それを、先にもいつたが、浦上家と、先生の身を惜んで、わざと、手續をおくらせたり、殿のお耳へいれる事も、一刻のばしに延ばしてをるのぢや。――今夕、今夜、その邊が、關の山と思ふが』
『早速に仕ります』
『せめて、御家名の斷絶だけは、防がねばならぬ。先生も、こゝまでお勤めなされて――』
『御好意、心に銘じまする。忘れませぬ』

『ぢや、けふは、先生のお顏を見るに堪へぬから、お目にかゝらず歸るが、くれぐれも……』
兵右衞門の書齋の軒端にある芭蕉を、氣がゝりらしく振向いて、佐内は歸つた。
父の言葉に、眞理もある氣がして、けふは机に坐つてみたのであるが、書物は、馬鹿の顏みたいに見えた。いや、安閑と坐つてゐる自分の顏のとぼりだと思つた。
『かうしては居れん。姉に最後を――』
刀を帶て、奥へ覺られぬやう、濡れ緣から草履を突つかけて外へ出た。
すると、小門で出會ひがしらに、
『居るかつ』
はつと見たが、深編笠に野駈袴の浪人風の人物である。誰か、咄嗟に思ひ出せないので、笠をのぞいた紀一郎は、
『おうつ、伯父上』
『浦上家へ來るのも、たうとう、面隱しを被らねば參られないざまになつた。けふが、土壇場ぢや、兵右衞門に會はう、お前も來いつ』
怖しい權まくである。事態は想像のつかないものになつた。紀一郎は、この伯父、あの父が、

正面からぶつかる態を考へて、あわてゝ引つ返した。

埃に白くなつた革足袋が、づか〳〵と書齋へ通つた。提げ刀のまゝ、七郎伯父は突ッ立つたものである。兵右衛門はとみれば、唐紙の切れ端へ、文鎭をのせ、屈みこんで畫を描いてゐる。生來、近視眼なので、紙の上へ、顏を伏せるやうにして、極めて遲筆に、墨を惜み、線を惜み、小山水を寫してゐるのだつた。曾つて、藩主から拜領したといふ方禹魯の名墨が、室いつぱいに香つてゐた。

『兵右衛門つ。何を描いてるつ』

『畫ぢや』

『地獄繪か』

『ふ、ふ』

『畫どころではあるまいがつ』

側へ片膝を折ると、七郎右衛門は、兵右の畫筆をとつて捨てた。

『おぬし、噂のとほり、狼狽して、阿呆になられたの』

『さうかもしれぬ。然し、うろたへはいたさんぞ。畫をみられい。この潑墨……、墨はやはり、

良うなうてはいかぬものぢや。』

『畫など、武士には分らぬ。それよりも、聞いたか、本藩より鴨方へ、公文が廻つたことを』

『今し方、唐橋佐内がみえ、紀一郎と密やかに話してゐたが……』

『どう召さる。これが最後、もう浦上家へ足ぶみをする機はあるまいが』

『さう思ふて頂くのぢやな』

『祖先に對して……この名家を……』七郎右衛門は、唇をひッつらせた。涙と憤りとが、燃える顏を、異樣な形相にした。

『よいのかつ、それで——。淫奔な娘ひとりを盲愛して、武門の處置がなし得ず、みす〳〵斷絕を待つ心得か。』

『わしの家でござる。わしの娘でござる』

『呆れたもの……。も、もう、もう、何もいふ氣力はない』

『紀一郎、七郎右衛門に、茶を參らさう。——風爐、茶器をこゝへ』

『茶などゝ』

『まづ』

敷物を興へて、靜に、炭火をうつし、湯を沸した。薄手な煎茶々碗を、珠のやうに拭いて、

『かういふ時は、茶にかぎる。賣茶翁のまねごと、茶事ではない、心をな』

『ふむ。……お之のあゝした不始末も、武士の教養に缺けたお身の仕込ぢや。うなづけるわい』

『だがの、七郎右。――よう考へてみなされや、若い者が、戀をする、戀がすゝむ、子供が生まれる。植物で申さば、春がくる、花がさく、やがて實を持つ。――これや自然の理でござらう、何の不思議もない。人間なるが故に、罪人ぢやが、偖、われ等の若いうちは何うぢやつた』

『狂人の言として聞き置かう』

『わしは畫を描く。自然――それを歪めては、眞の畫は描けぬ。尊ぶものは、技でもない、名墨でもない、自然――だけぢや。――それに、精進する身が、何で、咲いた花を、むごい腕で折り曲げられよう。生した嬰兒を、他人の手などへ渡されよう』

憤然と、七郎右は立つて、天井へ言つた。

『和氣の天神城に、かくれなき武邊者、浦上遠江守宗景の裔苗も、代れば變る、もうお仕舞だつ。これきり會はんぞ、兵右衛門』

『やむを得ぬ。お達者に』

紀一郎は、伯父の後を追つて、外へ駈けて行つたが、もう、姿は見えなかつた。

『伯父上、免して下さい。父は、何うかしてゐるのです。きつと、父を救ひます、浦上家は支へてみせます。私の力で――一身で――』

岡山への街道へ向つて、彼は、膝をついた。誠意と武士の熱を、全身にもつてゐる伯父の姿へ、心で拜みながら、刀の柄を打つた。

『安心して下さい、伯父上、忘れてはゐませぬ。――紀一郎は長男です』

清掃

にほひがする。姉は、近くにゐる。きつとゐる。

この鴨方の他は、怖ちく、今は身の置き場すらない姉だ。逢曳をつゞけてゐた岡山の男も自首したといへば、忘れてゐた肉親も、急に戀しくなつてゐるに違ひない。

『老たる父の爲し得ぬことをする！　父の代りだ。家名のためだ。――何のくそ、斬らいでか！』

血ばしつた紀一郎の眼は、お陣屋のお濠内を殘す以外は、殆ど、隅なく探しあるいた。いつか、足許は眞つ暗になつてゐる。

然し、お之の影は、見あたらなかつた。

『もしや？……』

川べりを覗き歩いて、水草を、それかとも見た。神社の森の梢を仰いでもみた。往來の石井戸ものぞいた。

『そんな、良心のある姉か――』

ふと、思ひ出したのは、懇意な赤穂屋である。そこへ駈けた。

『喜左衛門、姉上が來てをりはせぬか』

旅籠の土間から、前後もなく、どなると、

『おう、浦上家の御子息。いつぞやは……』

阿蘭陀繪師の江漢が、どてらから坊主あたまを生やして、奥から半身を曲げた。

『喜左は、使に出てをるが、ちやうどよい折、一献參らぬか。よからうではないか、此方も、明日は發足――で、お名殘りを酌んでをる所ぢや』

近所の飯盛女が四、五人來て、相手のない彼の別宴を取り卷いてゐるのだつた。うつかり、口走つた悔と、不快な氣持に、紀一郎が茫然と息をついてゐると、

『お呼び申せ。手をとツて』

飯盛女たちは、立つて來て、紀一郎の袖をとらへた。紀一郎は腹立ちまぎれに、振拂つて、挨拶もせず夜の中へまた走つた。

『ゐない……』

滿身に疲れを背負つて、棒のやうな足を、わが家の方へひきずつて來ると、夜も更けた野原の中ごろに、牝牛が、まだ悠然と立つてゐる。牛も、不遇な飼主にかはれたものよと、紀一郎はあはれになつた。

『若様つ。……何處へ行つておいでたのぢや』

牛ばかりではなかつた。土塀の方に、爺やも立つてゐた。見ると、笠を首にかけ、草鞋をはき、旅仕度である。

『や。お前こそ、今頃から何處へ――』

『何處か分りませぬ。旦那様が、お待ちかねてござらつしやる』

早寢の父が、まだ起きてる？　――紀一郎は胸が騒いだ。

いつになく、屋敷は、煌々灯の數が多い。駈けこんでみると、玄關は、拭きみがかれ、庭には

水を打つて、簪目がついてゐた。部屋はどの間にも、さゝやかながら幅を床にかけ、何か、一輪の花が瓶に生けてあつた。どこともなく匂ふのは、父が、常に焚く香のかをりである。——ちようど、正月の朝を待つ、徐夜のやうであつた。

『紀一郎、戻つたか』

『あつ……』

彼は、茶室の竹縁に腰かけてゐた父と、弟の姿に、眼をみはつた。二人ともに、旅装をしてゐた。兵右衛門は、嚢づつみの琴を、革紐で、斜めに背に負ひ、紀二郎は、常の木刀とちがつた小脇差をさしてゐた。

『すぐ、お前も支度をせい。草鞋はそこにある。塵をこぼさぬやうに穿けよ。——そして、この包みは、そちが背負ふのぢや』

『父上、これは？……』

『御先祖、また、母上のお位牌』

『あつ、ではこの屋敷を』

『捨てゝ行くのではない。君侯へ、お返し申しあげるのぢや。——支度ができたらわしと共に、

紀一郎も、紀二郎も、お陣屋の方へ手をあはせて、代々の御恩をつゝしんでお禮申しあげい』

濟むと、靜に、門を出て、

『爺。——參るぞよ』

『父上、では住み馴れたこの鴨方も、今宵かぎり』

『今宵かぎりは、武家奉公ぢや。大地は鴨方から日本中の山川につゞいて堺はない。はゝゝ、明日からは、お前たちの空もひろいぞ。いやわしの慕ふ山川の自然もすばらしからう。まるで、母親のふところへ戻るやうぢや。さ、行かうぞ』

爺やは、牛の手綱を曳いてきた。牛の背には片鞍に深々と嬰兒を眠らしてゐる竹籠と、片方には、一箇の葛籠を結ひつけてあつた。

それ以外の物、何一つ、持たうとはしないのである。爺やが、提灯をともしかける。

『待て〳〵。御領土を離れるまでは、明りは御遠慮せねばならぬ。武士にあるまじき浦上一家の夜逃げ、さう、晴がましうては、追手たちが、迷惑であらう』

今朝の人々

紀一郎も、それを案じた。

脱藩の家士には、當然、追ひ討ちの嚴命がかゝるはずだ。鴨方藩には、幸に、父に私淑する人人が多いとしても、手を打つて見る者もむろんあるのが世の中だ。追手に出會へば、斬り捨ての凶刄にあふことは覺悟しなければならない。

寢しづまつたお陣屋町、見馴れた川、橋の名、森につゝまれた村。――惜別の眼から後へ去つた。

そして、二里。八島峠。

『爺、もう灯してもよいぞ』

本藩と支藩の領土境である。

その境界標は、二本松だつた。

提灯が、ぽつと灯つた。まだ、夜は明けない。光りの輪の中に佇立んで、海を感じる闇へ向つて、人々は息をついた。

すると――

五人ほどの輕裝した武士が、崖際の見晴茶屋の蔭から、づか〳〵と近づいてきた。紀一郎は、ぎよつとして、思はず、柄袋を脱つて捨てた。

武士たちは、圍むやうに、前へ竝んだ。支藩の者二名に、本藩の者三名である。眼と眼のかちあつた途端に、お互の唇が、固くむすばれたのは、その中に、本藩では伯父の水野七郎右衞門と、支藩の中には、唐橋佐内の顏が交つてゐた爲である。膝行袴ばきに、手甲掛けの身支度は、むろん、追ひ討の使者だ。が――七郎右衞門は、晝間とは、比較にならない程、血相が和らいでゐて、

『もう會はぬはずであつたが、唐橋殿の計らひで、最後のお別れにと、最前から持ちうけてをつた。すべては、殿の御寛大と、それを動かした同僚たちの友誼ぢや』

次に、唐橋佐内がいつた。

『浦上先生――いや玉堂琴士へ申し入れる。御出家の門出に、何の餞別もござらぬが、本藩にて成敗した死骸一つ、あの松の根方へ捨ておきました。如何ようとも、おまかせ申し上げる。――では、流浪の空、お體おいとひを願ひまする。申し上げる儀はこれだけ』

影の如く出て、影の如く立ち去りかけた。

『あいや、お待ちあれ、名残惜しや』

兵右衛門は、手をあげた。

肩の琴を下ろして、地上に坐つた。囊を解いて、七絃を撫で、靜に目をふさいだが、やがて、明琴の音が、顫へ、躍る指の先から哀々、嫋々と——

比登波。登我底登。

奴我免辭。

比登波。

以加留斗天。以加良志。

以加利登。

慾久乎。須天々已曾。

都彌爾古々呂波。

多乃志免……

彼方の松の根に縛られて俯向いてゐた武士は、慄然として、顏をあげた。兵右衛門も紀一郎も

見たことのない侍だ。だのに、彼の眼は心の底から詫るかのやうに、さんぜんと涙をながしてゐた。

のつそり、のつそり、爺やは、若侍のそばへ牛を曳き寄せた。牛が脚を折つて寢そべつた。

葛籠が開いた。

お之は、そこから新しく生れた。——眸に、少しも汚れてゐない涙と、明の星の光と、今朝からの魂を持つて……尤も、それは、お之ばかりではない。

作者附言——

玉堂浦上兵右衛門の事蹟とその畫蹟の研究者には、矢野橋村氏があり、布施萬歳氏があり。眞摯な傾倒者は他にも多く傳記の集成に努力されつゝあるやうですが、まだ遙だ漠たるものです。この稿、玉堂致仕の一説に據るも、江漢の西遊途次は年次に差があり、その脚色の技法を加味した所など、すべて小説たるの目的で書いたが爲です。特に玉堂研究家諸氏の指摘あらんかを思つて、敢て一言を附しておきます。

飢ゑたる彰義隊

夜明け前

一

血判をとること。
隊の名を選定すること。

このふたつが、その日の會合のすることであつたけれど、多くの顔が一堂によると、相かはらず、屈辱的な幕臣のたいどを痛憤するものや、澎湃と見えてくる大勢に反激する聲だのに、あらかたの時間が、空費された。

會場は、淺草の本願寺だつた。

參加したものも、雜司ヶ谷の茗荷屋で初めての祕密會をやつた時から見れば、何十倍にもふえてゐる。もう、けふのは祕密會とはいへない。また司會者も、敢てこそ〳〵やらうとは思はない。

いつでも來い、といふ氣勢がいつぱいに鬱してゐた。

だが、表向きは「尊王恭順有志會」といふのが、その日の名目である。

『では……』

機を見て、次席格の天野八郎が立つた。

あの、烱としたまるい目が、騷音を掃くやうにズウと席上を見まはした。

『今、頭取の澁澤氏から、血誓帳をまはしますから、順に、御血判を』

血判といふ一句のもつ嚴肅さが、水をうつたやうに、熱ツぽい席の空氣に沁み透つた。

方丈の二間をぬいた座敷の上に、まるで具足を置いたやうな折目たゞしい人物が數名坐つてゐた。盟主がはの、澁澤成一郎、天野八郎、須永於兎之助、そのほか、硬骨な幕臣のうちでも、錚錚たる人たちである。

次へ、次へと、血判しては送られてゆくものへ、その人々の目が、いち〳〵微かにうなづきを見せた。

それがすむと、隊名の選定であつた。

貫義隊といふ案も出た。昭武隊といふ說も出た。そして結局、彰義隊がいゝといふことに決ま

つた。

『彰義隊』

『彰義隊……』

新しい使命を持つて生れた自分たちの團名を、心へ彫り込まうとするやうに、各々が胸のうちでくり返した。

みんな、ほつと顔を見合つた。今までの個人的な悲憤はやんで、團結の氣づよさを感じ合つた。

それまでは、誰もかれも、暴風的な大革命に會つて根からくつがへされた幕府の枝葉に附隨してゐた自分たちは、この際、どう生きて出るか、どう散るのが本當か、ほとんど思ひ〳〵な去就に迷つてゐたに違ひない。小さな、悲憤や不平を洩らしてゐるまに、江戸城明け渡しといふ天下の取引が、たつた一日で行はれたりする世の中を見ては、君家を思ふ公憤はあつても、武士道に立つうごきかたはあつても、茫然とするばかりで、手が出ない。

會合は、灯を用意せぬうちに終つた。

白い水蒸氣が、春の夜らしく本願寺の境内をぼかしてゐる中へ、耳朶を朱くした人々が、三々五々にわかれて、巨きな屋根の下から散らかつた。

彰義隊といふ、はつきりした誕生をつげて來た彼等は、みんな、胸のかたまりや迷ひを、預けて來たやうな淸々しさを感じた。

『もう、自分たちの爲すことは極まつた。おそらく、吾々の仕事が三百年の死花になるだらう』

大谷内龍五郎も、自分の手で糾合した多勢の同志たちに取卷かれて、西門の橋から新堀ばたへ歩きだしてゐた。

『だが、今日になつて顏を見せぬ不都合なやつが、この組のなかにも二人あつた』

ひとりが突然、慨然とした聲調でいふと、

『うむ。吉澤市之助だらう』

『それに、藤田寛二だ』

と、柄を打つて、怒るものがあつた。

齋藤金左衞門は、もう年配な男だつたが、わけて、吉澤や藤田と別懇な間がらであつただけに、

『鮫ケ橋の寄合にも、盟約の席に列してゐながら、いよ〳〵今日の血判になつて、姿をあらはさんとは可哀さうなやつだ。あゝいふ侍が、當今もつぱら幕臣の面よごしをするやつ、鳳上にも

おけない代物だ』

激した聲で、唾を吐いた。

『おのれの命だけをたもつ爲には、節操をまげても、同志を賣つても、官軍のお覺えにあづからうとする。こんど出會つたら叩ッ斬ることだぞ』

『よし、拙者も氣をつけてをる』

金左衞門以外の相當年をとつた者は口をとぢてゐたが、六七人の血氣者は、金左衞門の痛罵に煽られて、往來なかでもう殺誅の相談をやつてゐた。

龍五郎も小耳にはさんだが、薄暗い寺町の附近まで來ると、肩をならべて來た金左衞門が、

『あ。隊長殿』と、袖を引いて——

『あれへ、お嬢さんが迎へに來られてゐるやうですが』

『え、歌が』

敎へられて、彼は初めて氣づいたやうであつた。新堀の水際に立つて、(お父樣……)と呼びかけてゐる眼ざしが見える。

『歌ではないか、何しに來た?』

龍五郎が寄つてゆくと、彼女は、父のうしろにゐる多勢の連れを憚るふうであつたが、そつと父のそばへ寄つて、

『あの……先程から吉澤樣と藤田樣が宅にみえて、何か心配さうに、お父樣のお歸りを待つて居らつしやいます』

と告げた。

お歌は、あまり身飾りをしないが、痩せぎすで、たのもしい感じのする、いゝ娘であつた。

二

大谷內は、古河藩に籍をおく、佐幕の硬骨だつた。槍術家であるところから、槍できたへた四肢は、四十を越えた人とは思へない若々しい筋肉をもち、その、ゆつたりとできた偉軀は、人になづまれやすい親しみと、權力に屈伏しない氣慨と、兩面のものに見えた。

『隊長殿。……お留守に吉澤と藤田が來てをるといふ話ぢやありませんか』

彼が、お歌と共に鳥越の隱れ家まで歸ると、同志の齋藤金左衞門だけが追つて來て、かう言ひながら、門口をついてはひつた。

『まあ、はひり給へ』

『怪しからんやつだ』

金左衛門は、あらい語氣を放つて、大谷内のあとについて上つた。その目が、すぐに、悄然と固くなつて坐つてゐる二人の青年を見つけだして、いやしむやうに睨めおろした。

『先生、おわびに參つたのでございます』

龍五郎の姿を見ると、恐れるやうに、待つてゐた二人はすぐに、ぺたりと額を疊につけて、事情をのべた。

『手前の母は、なんとしても氣の弱い、いはゞ理の分らぬ女なのでござります。時勢のことなど、まるで知つてをりませぬ。父は、御承知のやうな病身で、これも、永年腰が立てない體、幕府の瓦解のさまを、世間に立つて、まのあたりに見る者とは比較にならない考へをもつてをりますので、私に、どうしても、死ねとは言つてくれないのです。……下には、十四になる妹、十一になる弟、そのほか乳呑兒まで、五人の小さいやつ共が居るので、母は、私ひとりを頼り切つて、もしもの事があつたら、病人と幾人もの幼な子をかゝへて……』

『分つた。もうよろしい』

龍五郎の不機嫌なことばが、吉澤のおど〳〵した言譯の咽喉をしめるやうに、默らせた。

『藤田』と、ついでに、一方へも向き直つて、

『君の辯解も、ほゞ吉澤と同じやうなものだらう。ことに、貴公の血緣では、譜代の御恩を忘れて、官軍に走ツた者が二三あると聞いてをる。また、皮肉ではないが、美しい新妻を持つてもをられる。無理もないことだ』

寛二といふ若い侍は、眞つ赤になつてうつ向いてゐた。大谷内として、こんな軽のある言ひ方は滅多にないことであるが。藤田といひ、吉澤といひ、槍法では師弟であり、常に信頼をかけてゐたので、彼としては、甚しく、殘念だつた。

『歸り給へ！』

最後のことばを投げると、そこに居た齋藤金左衛門が、いきなり立つて、二人の襟がみを無雜作につかんだ。

『外へ出ろ』

『……』

『同志に代つて、成敗してやるから外へ出ろ』

『……』

『よくも、けふとなつて、そんなのめ〳〵とした事を隊長殿へ言つて來られたものだ。病人がどうの、母がどうのとぬかして、その腰の立てない人間に至るまで、今日まで生かして來て戴いたのは、みな將軍家の御恩德ぢやないか。貴樣たちは、自分の命が助かりたいばかりに、そんな口實を設けて、世間でいよくこの難關を逃げようとするに違ひない。犬め、非武士め』

と、次の間まで引ずり出して來て、踏み、蹴とばした上、もういちど其處で、

『さ、外へ出ろ。すこし血の氣があるなら口惜しいと思へ。相手になつてやるから』

と、吹鳴つた。

お歌は、歸るとすぐに茶を淹れる支度をしてゐたが、物音におどろいて襖をあけ、金左衞門の血相にすがりついて止めた。彼も、刀をつかんで、鯉口まで切つたが、吉澤も藤田も、飽まで、面目なげに伏してゐるので、やつと、思ひ止まつて奥へはひつた。

二人は、悄々として大谷内の家を出たが、外へ出ると、怒へて來てよかつたといふ氣持がした。そして、默然とわかれて行つた。

『吉澤さん。吉澤さん』

吉澤市之助は、自分を追ひかけて來る下駄の音を聞いて立ちどまつた。見ると、勝手口から急いで來たらしいお歌である。

『あ。……只今はどうも』

『あの、失禮な物ですけれど』

『え』

『お母樣や、御病人にさしあげて下さいまし。私が、いたづらにこしらへた、萩の餅でございます』

袂の下から出して渡したお重箱のつゝみに、吉澤はうつかり手を出しかけたが、急に固くなつて、

『いつも濟みませんです。しかし、今後はもう二度と、先生の家のしきゐを踏めない自分ですから』

『いえ、お重箱はまた、私が出たついでに、戴きにうかゞひます』

『でも』

『あ。……父が呼んでゐます。吉澤さん……』

無理にそれを渡して、お歌は裏口の木戸へ駈けこんでしまつた。

三

まだ夜の明けない六刻前に、一發の砲聲が、江戸ぢうの町家の柱をゆすぶつた。これが官軍の砲聲が市街をおびやかした第一聲であつた。

戊辰、五月十五日である。さみだれにしては風のつよい雨が、全市の上に煙つてゐた。

どうしても、いちどは、地殼をやぶつて、火を噴かなければ熄まない硬直な幕臣たちの鬱勃は、やうやく、その跳梁を露骨にしてきた官軍の新政府ぶりを白眼視して、われらは、武士の誇りを唯一のものとして東叡山の堂塔に據り、先頃から十分に戰備をとゝのへて、討伐軍の總攻擊へ、ほとんど素肌のやうな武裝で意氣を昂げてゐた。

『なんだ、今御本坊へ通つたのは』

『使者だ』

『官軍のやつか。なんで今頃、そんな者を黑門から中へ通すんだ。煙硝玉を喰はして追ひ返してしまふべしぢやないか』

『寛院の宮のお使と田安家のお使者ださうだから、手荒にはできない。どうせ和解のお使だらうが、形式的なものさ。今、池田大隅守殿が、御本坊で會つてゐる』

黑門附近の彰義隊の武士たちは、充血した眼を上げて、こんなことを叫び合つてゐた。そのうちに、ほどよく扱はれて歸つた兩使者の騎馬が、上野の三橋を過ぐるとすぐに、山からも市街からも、いちどに、砲聲が鳴りひゞいた。

雨は小やみもしないが、いくらか空が明るくなつて來た。

黑門口の一方をうけた、赤組九番隊の大谷內龍五郎は、くゝり袴に脚絆わらぢといふ、身輕な武裝に、槍を持つて、ゆうべ新門の身內が、官軍の目をしのんで贈つてきた「鉛酒隅田川」のかがみを拔かせて、隊士と共に、柄杓飲みをしてゐた。

そこへ、清水門へ使に行つた、隊士の中根文藏が歸つて來て、

『もう穴の稻荷では、戰端がひらかれてゐるぞ』と、息を切つて、一同に告げた。

『急くことあない。まだ〳〵小競合ひだらう』

と、大谷內は常のやうな態度で、

『小林、柴山、土屋、こゝへ來て飲まんか』

と柵の際へ寄つて、口を結んでゐる部下たちをよび集めた。そして、自分が代つて暫く市街の様子をながめてゐた。

蕭條とけむる五月雨の底に、江戸市中の屋根が墨のにじんだやうに見える。今朝の砲聲では、落着いて朝飯をたべた者もないだらう。幕府の臣でゐながら、命をすてたくないばかりに、市井にもぐり込んでゐる人間共も、今朝の空に鳴る音は、あまり寢ざめがよくあるまいなど、思つた。

そして彼は、彰義隊の大旆とする、

（われらは賊臣にあらず、一死、君家に義を立つのみ）

といふ立場に立つた自分を、もつとも正しいと思ひ、幸福だと信じた。少くも、蟲けらのやうに、市井の塵芥のなかにおど〳〵生きてゐる多くの幕臣よりも、幸福な道をふんでゐると信じた。

『笑つて死なう！』

彼の氣持は、決して、暗いものではなかつた。

『おつ！　先生』

突然、さういふ聲が聞えた。

彼は振顧ると、同時に、その足元へ、ぱた〳〵と駈けて來たものがある。二人を送り屆けて來

た車坂口の番兵は、目禮して引つ返して行つた。

『オ、、君たちは、吉澤に藤田ぢやないか』

自分の足元へ、平伏した者の姿を見て、大谷内は、びつくりした。そして、涙ぐましい欣しさに、思はず、手をのばして、

『よく來た』

と、二人の手を固く握つた。

『先生、いつぞや申し上げた、吾々の心得ちがひを、どうかゆるして下さいまし』

『よくやつて來た。もう、何も言ふことはない』

『實に悶えました。藤田も私も、似たやうな境遇なので、あれからも、二人で考へぬきました』

――然し、けふの夜明け前にどウーんといふ大砲のとゞろきを聞くと、もう、矢も楯もなくなつてしまツたんです。アヽ本當だ、先生が、とんどの事に與したのは本當の道へ行つたんだ。自分は、家庭のきづなに囚はれて、取り殘されてしまつた――。さう刹那に思ひました……だが、今からでも間に合はぬことはあるまいと、病人の父を、懇意な町人の家へ負ぶつて行つて預け、母や、小さい妹たちには、田舍へ行くやうに、因果をふくめて、出て來たのです』

『うム……』

吉澤のことばは、一息だつた。

息がきれて、話せなくなつたので、あとを藤田がかいつまんで述べた。

『吉澤氏が家を出て來ると、ちやうど、稲荷町の角で、私とぶつかりました。まつたく、二人とも、符節を合したやうな氣持で、同じ頃に、家を飛び出して來たんです。私も、お恥しいことですが、今朝になつて、初めて、先生を信じる心がきまつたのです。どうか、どんな雜兵の仕事でもかまひませんから、お吩咐なすつてください』

『おウ、大いに、やつて貰はう。だが、息休めに一柄杓飲め』

と、酒樽のそばへ連れて來て、九番隊一同へ紹介した。そして、このよろこびを、齋藤金左衛門にも頒ちたいものだと考へて、人員機械係りといふ部隊にゐる彼のところへ人を飛ばした。

金左衛門はすぐやつて來た。

『やあ、さすがだ！』

彼もまた、磊落に欣び合つて、共々、酒を酌みながら快を叫び合つてゐたが、その時、官軍の放つた四斤砲の彈丸が、すぐそばに炸裂して、すさまじい土と物の破片を一同の頭に降らした。

『それッ』

殘りの酒が、雨の大地にひろがつた。

濛としたまゝいつ迄も消えない煙のなかに、ふんぷんとして蒸ばしい隅田川のにほひと、濡れた抜刀の光りが、亂れはじめた。

四

東叡山の伽藍から雨の空へ燃えあがつた火の手をながめて、官軍の參謀大村益次郎は、

『うム、もういゝな』

初めて、眉をひらいて、双眼鏡を手から離し、西丸の樓から靜かに降りて行つたといふ。

ちやうど、その時刻にあたる。

上野の山内は、わづか半日で、あらゆる破壞の威力を見せてゐた。泥と血にコネ返された其處此處には、仰向けに、刺しちがへた、悲愴なむくろが、累々と枕をならべてゐる。中堂から出た焔は、今、すさまじい勢で、瑠璃殿、吉祥閣、そのほかの樓閣を、惜氣もなく燒いてゐた。なほ痛々しいのは、生木の燒かれる姿だつた。

屏風坂も破れた。車坂口にも闘ふ人間がない。どこも、かしこも、破れたといふ聲のみが聞えた。黒門の柵は、わけても、血と彈痕の標的にされた。

寛永寺の本坊のあたりは、煙のために夜のやうに暗かつた。火の粉、木の葉、物の破片などが熱風に吹廻されて、ほこりのやうに舞つてゐる。――やがて、宮様が、宮様が、といふ聲が、そのなかを走りぬけた。天野八郎の血まみれな姿も、チラと見えた。

もう山では、隊伍らしい程の人數は一ヶ所も、見あたらなかつた。たゞ、九番隊の吉澤市之助と藤田寛二だけは、死所を共に誓つて來たので、互に、離れないやうに、後先になつて、駈け出してゐた。

そして、谷中の藪まで落ちてくると、そこの木柵によりかゝつてゐた、大谷内龍五郎の姿をみとめたので、

『あつ、隊長殿ぢやありませんか』

と、狂喜して、飛びついた。

大谷内は、太股に、二ヶ所の彈痕をうけてゐた。で彼は、木柵に自分のからだを縛りつけて立ち腹を切つて果てようとしてゐる所だつたが、ふたりを見ると、快然と笑つて、

『いゝところへ來た。介錯をしてくれ』

と、日常のことでも頼むやうに言つた。

『隊長殿、それはまだ早まつて居ります。谷中や三輪方面の敵は、至つて手薄ださうですから、決して、落ちのびられない事はないと思ひます。さ、肩をお貸しいたします。肩へおつかまりなすツて下さい』

『いや、上野がやぶれ、宮様がお移りになつた以上、爲る仕事はない。爲すべきことは、みんな辛々しくやつて退けたんだ。もう、これ以上生きてゐてどうなるものか』

『ですが、池田大隅守殿、天野八郎殿、そのほか、土肥、本田、吉田先生、みんな、御存命の人たちは、思ひ〳〵に落ちてゆかれましたから、必ずや、御再擧のこともあるだらうと思ひます。……おゝ、それから、齋藤金左衛門も、先刻、部下に守られて、根岸方面へ立ち退きました』

『待つてくれ。人は人だ。こゝが死場所か、死場所でないか、おれとして、考へてみる必要がある』

『分るもんですか。失敬ですが、そんなことが人間に分りツこありません。そんなことを仰言つてゐるまに、血が、大變です。血が……。おい、吉澤、君の帶の端を裂け』

『もつと先へ行かなければ危險だ』

『來やがツたか』

『近づいてくる。……あの音だ、あの音』

鳥取と長州の官兵が、やたらにその邊へムダ彈を擊ちこんでゐた。二人は、ひとりの味方を救ひにかゝつて、今までのどの敵に對つた力よりも、遙かに高い熱と必死な人間になつてゐた。――無理やりに、藤田が大谷内を左の肩にかけると、吉澤が右腕を助けて、流れ彈をくゞりながら、田端の丘向うへ夢中で駈け下りた。

その勢が、幾たびとなく、赤土のぬめりに足をとられて、崖を辷つた。

藤田と吉澤とは、起きてはころび、轉んでは起きしながら、隊長のからだを肩にかけ直した。しまひには、共に泥と血にこね返されて、二人の見分がつかないやうな姿になつた。

『だいぶ、ぼん〳〵といふ音が遠のいたな』

『山の陰に來たせゐだ。然し、今のうちに、隊長殿の脚の傷を、どうにかしたいものだが』

『そこに見える屋敷には、どうやら、人がをらんやうぢやないか。』

『うム、こゝは、爭ひの杉といふ名木がある田端の三角屋敷らしい』

『一息つかう。そして隊長殿の……』

『いや待て、どうせこの戰だから、家人のゐる氣遣ひはないが、念のために、一應、中の樣子を偵察して來るから』

と、吉澤市之助は、自分ひとりで、注意ぶかい目をして、その門内へ、潜りこんで行つた。

ずつと、一巡してみたところでは、べつに、官兵が潜伏してゐるやうな氣ぶりもなかつた。で彼は、安心して戻りかけたが、ふと横手を見ると、床のひくい緣下の濕地に、一本の槍の穗が、ギラと、光りを吸つてうごいて來る。

五

吉澤は油斷をしてゐなかつた。すぐ、飛びさがつて刀の柄をつかんだ。

だが、そこに見えた槍の先は、案外悠長に、地べたをスリながら這ひ出して來るので、さては、敵ではない、と氣をゆるしてゐると、溫和な顏をして、柔かによく肥えた、色の小白い三十前後の侍が、青組一番隊の印のついた鉢卷をして、

『やあ、あなたは、小普請に務めてをられた、吉澤氏ぢやないですか』

と、縁の下から、顔を上げて笑つた。

その笑ひ顔が、またばかに自然で、彼自身が、床下の奥で、獨りクツ〳〵笑つてゐた殘りを持つて出て來たやうに見えた。

こんな日に、こんな明るい笑ひ顔を見たことは、吉澤には實に意外だつた。

この變な男はだれだらうか。――彼はしきりに考へ始めたが、どうも思ひ出せない。やはり確なつもりでも、自分はよほど顚倒してゐるなと、その時、ふと淋しい自省を持つたりした。

『一番隊のお方とお見うけするが、失禮ですが、どなたでしたらうか』

『お忘れですか、一つ橋家の近習番、土肥半藏のせがれ、庄次郎ですよ』

『あ。土肥庄次郎殿で』

やはり幾度も逢つてゐた人だつた。毎年、兩國で水馬調練のある期間は、山口仲次の水泳場でよく見かけてゐる顔である。

まだ次々に思ひ出せることがあつた。それはこの土肥庄次郎がたいへんな遊蕩家であるといふこと、またその後勘當されて、荻江節の師匠の二階に間借をしてゐるといふやうな噂や、槇して、この男の譽とも思はれないやうなことばかりであつたが、その土肥庄次郎が、どういふ發奮から

の考へで、彰義隊などに加盟したのだらうか――彼にはふしぎに考へられた。

『ひとりですか』

と、庄次郎はふいに訊ねた。

『いや、同じ隊の藤田と一緒で、それに、隊長殿が深傷にひどい傷をうけてゐるのを、途中から無理にとゝまで引つ擔いで來たところなのです』

『ほ。それは難儀なことでせう。そして、これから、どう向つて落ちるつもりですか』

『板橋方面へ出ようかと思つて』

『あぶないッ』と、庄次郎は、顰めた顔のまへで手を振つて、『板橋は避けた方がいゝでせう。何しろ巣鴨、王子、十條附近には、各藩の官兵が一番廻つてゐるらしいです。むしろ、千住、荒川筋あたりの方が、途中も樂だし、潜伏所もありませうよ』

『さうでせうか……』と吉澤は、相手の親切な注意に感謝しながら、

『して、君はどうしますか』

『手前ですか。……實は自分は、この附近に暫くもぐつてゐて、わざと江戸の市中に潜伏するつもりでゐます。一種の反間ですな。いや、何しろひどい始末になつたものです。もう、泣いても

笑つても追ツつかない、世の中は新規蒔直しですよ。お互に、こゝまでやれば、思ひ殘すことはないでせう。あはゝゝゝ……あの通りだ』

と、上野の山の方から、亂雲のやうにながれてゆく黑煙を、仰向いていつ迄もながめてゐた。

まつたく、泣いてゐるのやら、笑つてゐるのやら、わけの分らないこの男の顏だ、と吉澤は思つた。

すると、突然、附近の木立で、四五發の銃聲がひゞいた。そして、人の叫びも近く聞えた。

『あつ』

二人が、そこを飛びわかれたのと、殆どいつしよに、ヒユーツと風をきつて來たものが、うしろの緣框にブスツと中つた。

『來たツ』

さういふと、土肥庄次郎は、あの肥ツちよな體をしながら、おそろしい速度で、どこかへ隱れてしまつた。

吉澤の方は、不意な銃聲を耳にしたとたんに、隊長の身にすぐ不安を感じたので、あわてゝ藤田の待つてゐる塀の外へ駈け戻つて行かうとしたが、もうその時は、土州か鳥取藩らしい官兵が

附近の欅の木にのぼつて、銃をとつて噪いでゐたし、塀の上にも、錦布れの兵が幾人もすがたを見せて、彼のあとさきへ、ばら〳〵と、跳んで降りた。

氣ちがひ茄子

一

彼には、夢としか考へられなかつた。

太政官の『諸事御改革により赦免をたまふ』といふ布告で、彼が牢獄から世の明るみへ突き出されたのは、土州兵にとりまかれて田端で捕はれたあの五月雨の日から、ちやうど、一年半ぶりであつた。

その、わづか一年半のあひだに、世の中はなんといふ變りかたを告げたのであらう。何もかも御改制ばかりだつた。

江戸は東京となつてゐた。年號も變つて、明治二年である。

『夢だ。まるで……』

吉澤市之助は、茫然と新しい東京のすがたに目を瞠つた。そこにあるものは、すべて遠つた世

界の物のやうだつた。ダンブクロと罵つた羅紗の着物は、それへ大小をさして、舶來の洋傘をかさした官員級の侍が、誇らしげに歩く新人の服裝であつた。二頭だての馬が、大きな箱車に客を盛つて、カラン〳〵と鈴を鳴らしながら、のろい駕屋を追ひ拔いて、新帝都の街路をいさましく駈けてゐた。

何もかも新しい生氣をもち、新しい形をもつて、秋の陽の下に、東京はうごいてゐた。

たゞ吉澤は、往來に見るどの人間も、いつのまにか、昨日の不平や怒りはけろりと忘れた顏で、一樣にセカ〳〵働いてゐるのが、なんだか不合理に思へてならなかつた。人の頭を疑つてみたり、自分のあたまを糺してみたりしたが、結局、なにもつかめなかつた。

繪双紙屋のまへでは、この春行はれた、遷都の錦繪に、人がくろやまになつてゐた。吉澤もなにげなく人なかに立つたが、店の隅に懸てあつた三枚つゞきの「彰義隊ノ賊兵黑門口ニ血戰ノ圖」といふ眞つ赤な繪を見せつけられると、眼をそむけて、すぐそこを去つた。

『賊兵か……』

かう呟いて、一種ものさびしい氣もちを搖すつてみたが、皮肉に笑つてみると苦笑も出なかつた。

三井の横から大通りへ出ると、そこにも、民部省の大官が、馬丁に鞭ばらひをさせて、馬車の上から、往來を睥睨してゆくのに會つた。彼は、それを見まいと努めながら、つい振顧つて路上の馬糞をふんづけてしまつた。

『靜岡へ行かう！　靜岡へ』

迷つてゐた足は、それから一本槍に日本橋を越えた。もう矢もたてもなく、元の御家風の膝下が戀しくなつた。なじみの幕臣たちがしたはしくなつた。

そこらで、彼が聞きまとめた噂によると、朝廷の特別な思召で、德川龜之助は新に駿府の祿地にうつされて（七十萬石を與へられた。で、前に仕へてゐた君側のもの達や、そのほか直參の侍たちは、こぞつて、家族をひきつれ、君公に從いて靜岡へ移住し、その殆どが今ではそこに住んで居るともいふし、また彰義隊の生存者も、四十何人から集まつてゐるといふ話だつた。

『隊長殿はどうなされたらう。藤田寛二ぼ生きてゐるかしら。あゝ、會ひたい』

東海道へ出ると、彼の足は、ひとりでに輕くなつてゐた。

二

『元の江戸がそツくり靜岡に移つてゐる！』

吉澤はそんな空想をえがいて、東京を振り向く氣も出なかつた。

神奈川で雨にあつた折に、一本の古洋傘を買ひ、天氣の日も、それをさして歩いた。今年にかぎつて、秋の陽がかくべつ强烈に感じるのは、永らく獄舍にゐたせゐであらうと、自分の身にもいたはりをおぼえた。

日ならずして、彼は、靜岡へついた。

その城下の町を、白い埃のたつ彼方にながめた時、彼は、故郷にたどりついた以上のうれしさをもちながら、ほつとして、汗をふいた。そこには、目と目だけで打ちとけ合ふことのできる知己ばかりが住んでゐる。そして、昔ながらの武家氣質や、溫かいものが迎へ入れてくれるにちがひないと思つた。

――落着く家がきまつたら、母や幼い者も靜岡へ呼ばう。人手にあづけた病父も早くさがして迎へとらう。海が近くて松が多い、この邊の空氣は、病人にもきつといゝにちがひない。

彼の甘い空想は、いつか、錢座の木戸にかゝつたのを氣付かずに通りかけた。

と、城下口の番所で、彼のうつゝは醒まされた。木戸に近い番役所のなかに、二三人の役人が

ひかへてゐたが、

『……御浪士！　オイ〳〵、どこへ通られるか。最前からあんなに呼びとめてをるのに、なぜ知らん振をして行くのだ。不都合ぢやないか』

と、そこへ出て叱りとばした。

『や。つい考へごとをして歩いてゐたので、失禮いたしました。御立腹ならば、どうか勘辨して戴きたい』

『第一、どこへゆく？』

『御城下へはひります』

『なにしに？』

『何といふこともないですが……』と彼は思はず薄い笑ひをゆがめた。『知人も多勢移住してをりますし、また、上樣のお膝下をお慕ひ申して、やつて參りました』

『近頃、さういふ口實をもつて、猫も杓子も集まつて來て實に困る。御城下に來たからといつて、飯がこぼれてゐるわけぢやないのだ』

『いや、そんな者と思はれては心外です。自分は、吉澤市之助、もと小普請に勤めてゐた者に相

違ないのです』

『吉澤といへば、彰義隊の加盟者に有つたやうな名だが』

『いかにも！』と彼は、同輩と思ふその役人へ、誇りをもつて答へた』

『九番隊の大谷内龍五郎の手について働きました。その、吉澤市之助であります』

突然、ひとりの警士は、かれの胸板を突くやうにして言つた。

『不可ん！　彰義隊の者ならば、斷じて、御城下に入ることは許されない。あとへ歸りたまへ、通すことはならん。』

『な、なぜですッ？』

彼は、むつとして、詰問した。

『なぜだか、そんなことは知らんが、上様からの御布達だ』

『わからんです。そ、そんなばかな理窟はない。間違ひだッ、間違ひだ』

『見たまへ。何が間違ひなことがある。この通り藩廳の達しが番所にも貼つてあるぢやないか、目をあいて見ろ』

『いや、間違ッてゐる。彰義隊の隊士といへ、みな昨日までは一様に上様の家來ではないですか』

ま、まして、申しては畏れ多いが、最後の最後まで、德川家のために戰ッた人間が彰義隊だ。吾吾の彰義隊だ。それだのに……それだのに、御城下へ入れない？……ほかの、酢とも蒟蒻とも、どつちつかずにゐた曖昧な侍や、自分の一身ばかり上手にやつて通つて來たものは入れるのかッ。聞かう！　承はらう！　說明してください。——吉澤市之助にはどうしてもそんな理窟は分らんです』

彼は、憤然と古洋傘をかゝへて、胸を張つた。

顏は、まつ蒼に冴えてしまつた。こめかみのすぢがビク〳〵うごくたびに、目は泣きたいのをこらへて居た。

三

彼のふりしぼつた聲のなかに、何かひとつ、決して胡麻化しをゆるさない、胸をうつものがあつたとみえて、相手はグッと黙つてしまつた。

すると、誰かうしろから、輕く彼の肩をたゝいた者がある。

『——君。まあさう恐り給ふな。今のことばは至極もつともだ。然し、お上の立場を十分にお察

しするのも臣下の務だ』

『……』

瞳のひらいたやうな眼をして、吉澤は、ぐるりと後を見た。

そこに居た人は鞭を持つてゐた。右の手には馬の口輪をつかんでゐる。羽織、袴の正しい身なりなる上に、均整した體幹をそなへ、靜かで威のある顏だちの持ち主であつた。

『つい、激しまして、亂暴なことを言ひ放ちました。失禮ですが、あなたはやはり御君側の方でせうか』

『わしは、山岡です』

『あ……鐵太郎先生で』

『まア、屋敷へでも來いと言つてあげたい所なんだが、表面、かういふ御規則としてある以上、破るわけにはゆかん。……つまり、君たちの心としては、德川家に殉ずるつもりであつたかは知らぬが、あの東叡山の暴舉の結果は、決して、上樣にいゝ結果を齎しては居なかつた』

『おことば中でありますが』

『ま、聞き給へ。——然し、彰義隊のやつたことは、痛快なことにちがひない。はツきりした武士道だ。德川家の人間を代表して萬丈の氣を吐いてくれたものだ。鐵太郎なども、その點では大いに買つてをるが、明治の御聖代となつた今日になつてみると、いつたん賊臣の名を負つた君たちを、この靜岡へ入れることは、朝廷に對しても憚らなければならん。また、太政官の諸卿の思はくもあつて、そこには、いろ〳〵な御政治向きの細かい御都合もあることだ。默つて歸つてくれたまへ』

『お話は分りました。けれど、お膝下を離れて、どこへ歸りませうか。上野へ馳けつける時に、病人の父も、母も、小さい弟や妹たちも、みんな散り〴〵ばら〴〵にして行つたのです。歸る所はありません』

『うゝむ……ぢやかうしては何うか。後へ戻つて、沼津在の金岡まで行く。すると、あの附近から玉川村邊には、彰義隊の殘りが四十人ばかり寄つてゐるさうだ。そこへ參つてみたらどうだ』

『ぢや、それは沼津の在方でしたか。實は、東京を出る時からみんなに會ふのが、樂しみの一つだつたのです』

『行つてみたまへ、九番隊の大谷內龍五郎も、存命して、そこに一緒にゐる筈だ』

『えつ、ぢやあ隊長殿も、まだ生きてをられますか、有難うございました。早速これから出かけ

てみます』

『だが、金岡にゐる、彰義隊の諸君に會つたら、わしが言つたことをよく言傳してもらひたい。どうも、いろ〳〵よくない風聞が、靜岡へ洩れて來て困る。上樣をお怨み申したり、薩廳の扱ひかたを不平として不穩なことばを言ひちらしたり、そんな事は、つゝしんだ方がよからう。……と、かう傳へてくれ。忘れないやうに』

『承知しました』

言傳の內容はよく分らないのであつたが、ひとつ、大谷內の存命であるといふ消息が、どんなに、彼の元氣をよろこばしたか知れない。

彼はまた、元の道へ引つ返して、洋傘を杖につきながら、獄舍で腰縛のついた足を痛さうに引きずつた。

四

時々、腹毛の白い小禽の群が、淚をかすめて、野末の雜木に吸はれ込んだ。

そこは、沼津藩の金岡といふ荒蕪な平野だつた。

篠や雜草が波を襞かしてゐる果は、いくつもの丘の起伏となつて、そのあなたに、富士と愛鷹の二山が、肩を重ねて屹立してゐる。

その金岡の荒地には、けふも、二三十人ほどの者が、よく澄んだ大空をいたゞき、秋の陽に直射をあびつゝ、汗になつて、開墾してゐた。

半農半武士といふか、見ると、その人々は、百姓仕事をしてゐながら、いづれも、刀を差してゐる。

そのなかに、大谷內龍五郎のすがたが見出された。藤田寬二の顏も見えた。なほよく、ひとつひとつの顏を改めてゆくと、岩田源吉、小松崎幸藏、山本慶八、小川相太、野村嬰葉、百井求造など、みな東臺の白兵戰で大刀に血を飽かしめた猛者である彰義隊の生存者たちである。

この、俄ごしらへの百姓たちは、工夫まち〳〵な野良支度だつた。筒袖の山着などは、いくらかイタについた方であるが、木綿のやうな膝行袴をはいたり、よごれ腐つた稽古着一つの者。或は、素肌の肩を落し、さうかと思ふと、黑塗の陣笠を頰かむりの代りに被つて、剛れない鍬で土掻きをしてゐる者もあつた。

寄觀ではあるが、笑はれないことだつた。

滑稽だと見るには、あまりにむきな勞働であり、悲愴な顏色でありすぎる。彼等は、こゝに芋でも蕎麥でも作つて、一日も早く、生きる糧を拓かうとして馴れない鍬を揮つてゐるのだ。

然し、その努力も、すぐ疲れて來がちであつた。この中には半病人の者もあつた。朝、水のやうな芋粥をすゝつたきりの人もあつた。實際、金岡開墾をやつてゐる彰義隊の生き殘りの人たちが、この數ケ月の困窮さといつたら、名狀のできないものであつた。

――すると、やがて誰だつたか、突然鍬を拋り投げて、自暴に大きな聲でかう呶鳴つた。

『あアつ。止めだ止めだ！　おれはもういやになつた。どう考へたツて、ばか〳〵しくツてこんな事がしてゐられるもんカッ』

その大きな獨り語に、皆がびつくりした樣子で、聲のした方を振顧つた。

小川椙太であつた。

自分で掘り返した根草のなかへ、小川はどつかりと坐りこんでしまつた。そして、煙草でも吸はうといふ氣か、ふところからかますを出したが、汲んで飲む粉もないので、それを煙管ごと目の前へたゝきつける。

『だれか、煙草を持つてゐないか』

小川は睨め廻すやうに同志の顏へ求めたけれど、皆、目を見合すばかりで、

『生憎だなあ』

『拙者のもこのとほりだ』

『おれもさつきから、煙草のにほひを思ひ出して居た所だが』

すると、百井求造がさびしい笑ひ聲をつくりながら、

『小川。一時の蟲おさへに、これでも服んでおいたらどうだ』

自分の煙草入を渡してやると、彼は、その豐富なのを怪しんで、

『煙草ぢやないのか、これは』

『氣ちがひ茄子の葉に、せんだんばらの葉を交ぜたものだが、結構、吸へないことはない』

『氣ちがひ茄子つていふのは、喘息もちがよく吸つてゐる、あれか？』

『ウム、その喘息病の木村がよく吸つてゐるので、これなら金がいらないから、拙者も眞似をして、煙草のない時の蟲殺しにしてゐるんだ』

『然し、こいつは頭腦によくないといふ話ぢやないか。この上、おれたちの頭腦が變に狂ツたひには、靜岡へだつて、何處へだつて、斬り込んでゆかないとは限らないぞ』

『叱ッ。……この野ッ原で、そんなことをやけ糞で、呶鳴りちらすものぢやない』

『何、かまふ事があるものか。どうせ、今日になつても、まだ賊軍々々といはれて、繼子扱ひにされてゐるおれ達だ。それも、薩長のやつらが言ふならまだしものこと、靜岡におべかッてゐる奴らまで、賊兵呼ばはりをしやがるから心外でたまらん。いくら神妙に百姿をしてゐても賊軍だ。いくら君家のために殉じたものでも永劫に賊軍だ。ばッ、ばか〳〵しくつて、自暴にもなりたくなるぢやないか』

みんな、いつのまにか、小川の悲愴な聲にひきつけられ、彼の周圍にあぐらをくんで、暗然と首を垂れてしまつた。

たゞ、大谷内ひとりだけは、皆と離れて、足のわるい後姿を見せたまゝ、鋤を持つて默然と土をすいてゐた。

若い人たちの不平をなだめる立場にゐる彼も、いつかしら、小川の痛憤に、耳をとられてゐた。

『この間の嘆願書が、どうか、藩廳の同情をうながしてくれゝばいゝが……』

彼は、心のうちで祈つた。

この金岡には、今、四十四人の彰義隊の生き殘りが集まつてゐる。それは皆、吉澤市之助と同

じやうに、靜岡に入るを許されないで路頭に迷つたものばかりだつた。

君公について、靜岡へ移つた他の藩臣たちは、それ〳〵改定された扶持をうけ、家族も共に新しい治世の落着きを得てゐるのに、ひとり彰義隊の者だけには、特別なおことばもないし、城下へも寄せつけないし、甚しい他人扱ひだ。

當然、彼等は食ふに困つた。

今日までの間には、血のにじむやうな實情をしるした嘆願書をなんど藩廳へさし出してゐるか分らない。しかも、今に至つて何らの沙汰もない。これだけの人間に――最後まで君家に殉じようとした意氣の人間に、一合の扶持米も下がつては來ない。

食ふに困つた彰義隊の勇士たちは、羽織や印籠を金にしたり、刀の目貫をツブシにして賣つたり、それこそ、やつと露命をつなぐ有樣で、こゝ十ケ月ばかりしのいで來たが、もうみんな裸同樣だつた。烈寒の裾野へ、冬が來たら、どうするのだと、言ひ合つてゐた。

さぐる所によると、徳川家の方では、新政府の思はくをひどく憚つて、それで彰義隊には冷淡をきはめるのだといふ噂だつた。

その噂を聞いた時に、やはり生き殘り組のひとりで、須藤といふ若い多感な男は、病氣で汚い

蒲團のなかに寢てゐたが子供のやうにオイ〳〵と聲をあげて泣いた。

——これはその時、大谷内龍五郎の發議であつたが、藩の氣がねがそこにあるとすれば、あくまで吾々は謹愼の意を表示するのが第一であると、一同をなだめて、金岡開墾の仕事にかゝつたのであつた。

が、一同の誠意は、一向みとめられさうにもない。少くとも、現在の狀態では、この開墾地に芋の蔓がのびる來年の秋まで、餓死せずにゐられるか何うかの方が問題である。

五

『金岡へはまだ何里ぐらゐありませうか』

とある家で、吉澤市之助は足をとめた。

この邊の庄屋らしい豪家だつた。眞ツ赤な實をつけた禪寺丸柿が、門にも土藏のそばにもあつた。

緣座敷で碁を打つてゐた庄屋ていの男が、

『金岡……金岡はもうすぐそこだが』

と碁盤から顏も上げないで答へた。

『そこに、彰義隊の人達がをると聞いて參つたんですが、御承知ですか』

『あゝ。なんだか野ツ原に小屋を建てゝ、どて〳〵して居るやうですよ』

『ぢや、この前の道を、西へ眞つすぐに行けば其處へ出ますか』

『西も東もない……すぐそこだと言つてゐるのに』と、不愛嬌に言つたまゝ、二人とも、盤から目も放たないで、パち〳〵音をさせてゐた』

吉澤はふと、その相手になつてゐる後向きの侍が、どうも齋藤金左衞門によく似てゐるがと思つたが、金左衞門ならば大谷内の親友で、よく知つてゐる仲だし、彼も彰義隊では人員機械係、りの伍長として働いたのであるから、當然聲をかけない筈はないと考へた。

『いや、失敬しました』

彼は、そこ〳〵に、歩き出した。

眞正面の空に富士がいツぱいに仰がれた。新しい東京は癪にさはる。然しこゝは、隱棲の好適地だ。——吉澤はそんなことを思つてゐた。

『あら……』

若い女の壁に、彼は、洋傘といつしよに顔を上げた。目の前の低い土手の上に、大谷内の娘のお歌が、驚いたやうな目をまんまるとさせてゐた。

『オ、、お嬢様ぢやありませんか』

吉澤は芒を分けて駈け上つた。

『まあ……』

と言つたきり、お歌はまだ彼の姿を見つめてばかりゐた。

『――夢ぢやありませんかしら、父はいつも、話が出ると、吉澤は死んぢらう、吉澤は田端の三角屋敷で死んだに違ひないッて、いつも、涙をうかべて言つて居ましたのに』

『いや、私こそ、靜岡へ行く迄は、先生が生きて居るか何うかと思つた位です』

『ぢや、あなたもこゝへ來る前に、靜岡へ無駄足をしたのですか』と、お歌のうれし氣だつた顏に、ふと暗いものがさした。

吉澤はその時はじめて、彼女の姿から淋しい窶れを見つけてゐたが、

『――僕はいまだに、あの時のことを忘れませんです。私と藤田寛二と、二人して先生の家へ加盟のできない事情を申しあげに行つた時、おそろしく叱られました。そして、齋藤金左衛門にも、

激しく罵られて、しよんぼりと外へ出ると、お嬢様が裏口で、私の母や、妹たちにと言つて、荻の餅をくれましたなあ……お重箱へ入れた荻の餅です。それに、お嬢様の、お手紙もはいつてゐました』

『あら……』

お歌は、眞つ赤になつて、むしり取つた芒の穂を、輪にむすびながら俯向いて歩いた。

『ほかの事は何もかも夢のやうですが、あのことだけは忘れないです』

『吉澤さん……私の心もちも、ほんとに同じことでしたのよ』

『あ。……然し先生は』

『開墾地で働いてゐます。今、飛脚が參りましたので、それを持つて、ちよつと走つて來た所です。不意に、あなたが來たと言つたら、父も皆さんも、どんなに吃驚することでせう』

『お父様、吉澤さんが……』

彼女がさう告げると、果して、大谷内は鋤を手から離して、愕然と、

『やあ。……吉澤』

と、駈け寄つて來たが、上野でうけた銃丸の傷で、ひどく跛行をひく樣なので、見たとたんに吉澤は、涙がいツぱいになつてしまつた。

すぐ、藤田寛二が彼の手をつよく握りしめた。

小川をとりまいて、悲憤に雷同してゐた者も、それを忘れて、みんな彼の健在だつたことをワイワイと祝福した。それを機ツかけに、黒門の血戰や立ち退き後の苦しみや、當時の回顧にも話の花が咲いた。

藤田は初めて心のをどる人達に會つた。また、そこに居るすべての者も、戊辰の五月雨の日を思ひうかべて、あの時の話に熱しる時ほど、幸福で居ることはなかつた。

然し大谷内だけは例外で、彼だけはその話へ彈んだことがないと言つていゝ。かへつて常よりも寡默になつて、何か考へこむ樣子があつた。

新來の同志を迎へて、一同が話に熱してゐると、そこへ、ばた〳〵ッと息をせいて駈けて來た者がある。

見ると、いつのまにか其處を拔けてゐた、野村蹇葉といふ氣輕な男で、何か、席につゝんだ泥だらけな物を重さうに抱へて來た。

『退いた、退いた。諸君、そとらの木の根や枯れ草をよせて、景氣よく火を焚きたまへ』と、吻鳴つた。

『なんだ〳〵野村』

『さつま芋だ、さつま芋だ。芋を掘つて來たんだ、芋を。——再生の珍客吉澤市之助を祝福するに、なんにも馳走すべきものがないから、芋でも燻べて大いに食ひ、大いに當時の追憶を語り合はうといふんだ』

『やあ、これは大した芋だな。だが、うまく燒けるか』

『燒けなかつたら生で食ふさ。少し土をかぶせて、藁や草をドン〳〵燃すのだ』

やがて、カツシリと白い煙が卷き揚つた。澄んだ青空に藁灰のチリが赤蜻蛉のやうに噴き散らされる。

大谷内は一同と離れて、今お歌の手から渡された飛脚をひらいて讀んでゐた。そして、じつと頬をかゝへて何か考へこんでゐると、最前、碁を打つてゐる庄屋の與茂作と、友の齋藤金左衛門とが、急ぎ足に連れ立つて來るのが見えた。

六

『お侍のくせに、餘り餓鬼道みたいな眞似をしなさんな』

芋を燻べてゐる火のそばへ來て、庄屋の與茂作は青筋を立て怒りだした。

『可哀さうなお侍達だと聞いてゐたから、今日までは默つてゐたが、もう承知はできんわい。默つてゐればよいことにして、夏になれば西瓜畑を荒す、秋になりや芋を盜む、間には米を貸せの、味噌を貸せの、煙草の葉を少し出せのと、すきな無心を言つて來て、今も小作の口から聞けば、何か畑の物を蓆につゝんで引ッぱり込んだといふ話だ。もう承知はならないから、今日までちび〳〵貸してきた味噌醤油の代やら、貸した金を、殘らずこゝで返して貰ひませう。拂へないならば藩廳へ訴へて出るからさう思つたがよい』

『なに、もう一度言つてみろ』

と、岩田源吉や小松崎幸藏は、あまり口汚い罵りに、顏色をかへて立ち上ると、彼に尾いて來た齋藤金左衛門が、あわてゝ雙方を仲裁した。

『おい〳〵、短氣をするな。何と言つたつて、理窟は吾々の方が十分にわるいのだ。與茂作もさ

た、今日まで何くれとなく世話をみてくれたものを、さう立腹せんでもよいぢやないか。今に藩君の方針が立てば、きつと何とか埋合せをすると申してをるのだから……』

『いや、もうお斷りぢや。一人や二人ぢやあるまいし、四十人以上もゐる人間に、この痩せた村を食ひ荒らされてたまるもんぢやない』

『なんだとッ。無禮なやつだ』

『これ岩田、もう刀なんどをひねくり廻して、それで通れる世の中ではないぞ。そんなふうだから藩廳の方のことも、嘆願書ばかり出したつて、いつまでも御憐愍のお沙汰がないのだ』

金左衛門が冷嘲すると、目を光らして眺めてゐたのが三四人、むッと立つて彼の肩を突いた。

『あつ。狼藉をするのか』

『こいつ、いやにつべこべと、庄屋の肩ばかり持つて、同輩の苦しみを思はぬ不埒なやつだ。第一貴樣の癪にさはることには、同輩の者すべてが、その日の糧にも困りながら、土まみれになつてゐるのに、庄屋や素町人の馳走酒を有難がつて、碁將棋ばかりさしに歩いてをる』

『少し話が横道ではないか。さういふうるさい話なら、おれは仲裁の手を引くから、與茂作はこの儘決を藩廳に仰ぐよりほかあるまい。折角、彰義隊の名を思ひ、同輩の將來を心配すればこそ

ついて來たのに、揃つてそんな量見では手がつけられん』

と、齋藤は捨て科白を言つて、サツサと歸つてしまつた。

むツと、駈け出しさうにした者もあるが、大谷内に止められた。同時に大谷内はまた與茂作に向つても、自分が借錢やすべての責を負つて近いうちに必ず埒をつけるからと熱心に說いて、引揚げさせた。

吉澤は、そのまゝ金岡に足をとめて、附近に散在してゐるホツ建て小屋に、皆と共に暮してゐたが、もう開墾地に出て仕事をする者も一日ごとに少くなつてしまつた。

いよ〳〵この冬は自滅だと叫ぶ聲が、冷靜な者の耳にもあたりまへに聞こえて來た。窮乏は前よりも深刻になつて、一日增しに病人がふえた。

さうした中にも、吉澤だけは、朝夕お歌と語りうる幸福が偷まれた。けれどやがて、そのお歌も、彼にも何も告げずに、大谷内の小屋から不意に姿が見えなくなつた。

一　東京新誌

『先生、近ごろお孃樣がおゐでなさらん樣ですが、どうしたんですか』

或る時、吉澤が知りたいところを、藤田は率直に、大谷内に向つてたづねてくれた。

『おう……歌か。あれは東京の親戚へ、ちよつとばかり金策にやつてある。自分もそれやこれやで、そのうちに、半月ばかり留守にするかも知れないから、その時には、あとを賴む』

その話に、ふたりとも、何の疑ひも挾まなかつた。

間もなく、東京から金がついたと言つて、大谷内は、早速、庄屋の與茂作へいつぞやの解決をつけた。金を見ると與茂作はまた少しづゝの米や味噌などを、金岡の小屋へ屆けさせて來た。

で、久しぶりに、ほツ建て小屋の炊煙は大いに賑つて來たわけだが、大谷内龍五郎はそこから不意に見えなくなつた。

『どうしたのだらう?』と一同が案じてゐると、それから二十日ほどたつて、やがて彼はまた跛行をひいて、どこからか金岡の小屋へ歸つて來て居た』

ある晩、その小屋へ、藤田と吉澤だけがひそかに呼ばれて、龍五郎のおそろしい眞劍な態度と向ひ合つた。

『やつと眞相が分つた。何にでも裏があるものだ……』

かう前提して、彼が話した。

『實はこの間、山岡鐵太郎から飛脚が來たのだ。それで自分は乞食に變裝して、靜岡の御城下へはひり、山岡や二三の者と密々に會つて來た。……その結果、初めて、吾々の誠意が屆くところに屆かない眞相を知ることができたのだが、それを知つた時、おれは涙が出た。……四十四人の同輩を墜し入れて、自分ひとりよい子にならうと計つてゐたのは、彰義隊以前から、おれとは刎頸の友であるあの齋藤金左衛門のやつだつた。金左衛門は薩の御扶持方や御君側のものへ、常に媚びた私信を出して、小川や野村などが一時の激情で口ばしる冗談に似たことまで、巨細もらさず、靜岡へ內通してをつたのだ。……鍬を持つて、それを知らずにお沙汰を待つてゐた、おれの不明は、實に恥入る、一同に申しわけのないことだ』

それまでは、彼の話に、少しも激發的なことばは交じらなかつたが、暫く、悵然と顏を上げてゐると、不意に、吉澤と藤田の手を握りしめて、

『濟まん！……許してくれ』

と、强く聲をふるはせた。

二人は見たことのない大谷內の半面に驚いて、

『濟まないなどと、先生から謝罪されることはない筈です。どうしたんです、どうなすつたんです。』

『いや、實にすまないと、今にしておれは胸が痛む。十分、君たちには怨まれていゝ値打がある。ましてや、君たちの老いたる兩親や、幼いものや、妻や、みんな路頭に迷つてゐるのであらう氣の毒な人たちからは、どれほど怨まれても、怨まれ盡きまい。……が、この大谷內も、上野で死んでゐたら幸福だつた。君たちを誤らせ、時代の熱で、あの當時の考へて見たとほりの世の中を信じて、お別れすることが出來て居たらう』

さう言ひ終つてから、彼は急に首を振りうごかして、暫く口をつぐんだが、やがてまつたく改まつたことばで、

『この上に、まだ君たちの若い前途をうごかす儀は申し譯ないが、飢ゑんとしてゐる同志四十人のために、もういちど大谷內の賴みをきいてくれまいか。……と言ふたら、今、慚愧らしいことばを洩らしてゐながら、まだ目がさめないで居るかと嗤はれるかも知れないが……』

彼は、用意しておいたらしい、四十圓某の金を、謹直そのものゝやうに、半紙にくるんで上へ路用と書いて二人の前へ出した。そして、もういちど、賴む。と言つて頭をさげた。

× × ×

肩に一刀、右肋骨の下に深い突き傷、うしろ小鬢にも切ッ尖傷があつて、齋藤金左衛門は見事にとゞめを刺されて、路傍に斬り殺されてゐた。

死體のあつた場所が、庄屋の興茂作の家から遠くない所なので、發見された前の晩おそく、そこでいつもの圍碁に耽つて歸途を待ち伏せられたものだと分つた。

然し金左衛門は、岡田十松と同派から出た使ひ手で、ずゐぶん老巧な腕であるといふ定評があつたのに、斬ッたやつもよく斬ッたものだが、いつたい誰が手を下したのだらうと、その刀痕について金岡の者も、一時しきりと首をひねッた。

二

明治四年の一月であつた。

もう松はとれてゐる月の末だつたが、どことなく浮かれ癖のとまらない人間の氣持が、あわただしい變革や進化をみせた東京の雰圍氣に宿醉して、新島原などは、臺でも、民部省の官員や三井商社の番頭を迎へて、流行歌の巷だつた。

そこの、河岸つゞきから遠くない「築地ホテル館」の正面から、今、山高帽に編上げの靴をはいた新時代のスタイルを代表する紳士と、茶色の唾をペッ〳〵と吐いてあるく傲慢な外人とが、華やかな取卷の連中のなかに、赤い顔を笑みゆがめながら、ステッキを振つて出て來た。

それを、玄關へ送つて出て、キチッと敬はつたとほりなお辭儀をした辮髪の支那少年を、取りまきの藝者たちが、可愛らしいと騒ぎ合つて、門を出てからも振返つた。

『おや〳〵、あの南京豆め、とんだ所でもてやがつた。おかげでこの露八などは、恬として、顧みられんなどは心細い』

と、幇間の露八は、その蒟蒻玉みたいに剃れた坊主あたまを、しなやかな手で打つてくれと言はないばかりに振りうごかした。

ホテル館の食卓で、西洋料理といふものを知つて來てお座敷の話題とすることは、柳橋一流のところを以て自負する彼女たちにも、巡り會つたやうな誇りだつた。彼女たちは往來をキャッキャッとはやしやいで露八を弄具にしながら歩いた。

そして外人と紳士とを、新島原へでも送り込まうといふのであらう。その手前の橋袂まで笑ひつゞけて來た。

と――裾の短い紺飛白の着物に、銀杏形の編笠をかぶつて、尺八を手にした一人の青年が、彼女たちの色彩に顔を俯向けて河岸を横へ曲がつて行つた。

『あ……』

露八はふと足を止めた。

そして、取卷の年增なものへ、何か頼み事を殘しておくと、大急ぎで追ひかけて行つたが、やがて、

『書生さん。……そこへゆく書生さん』と、手をあげて呼び止めた。

露八は肥つてゐるので、追ひつくのに骨だつた。紺飛白の男は立ちどまつて、

『僕ですか』と、笠をあげて待つた。

『やあ……』

『九番隊におゐでなすつた、吉澤さんぢやありませんか。』

『お、君は、田端の三角屋敷の床下に潜りこんでゐた、一番隊の土肥庄次郎君ですな』

『さうですよ。イヤ會ひましたなア。おつな所で』

『これは意外な方にお目にかゝつたものです。まつたく吃驚させられました。然し、君も今日ま

で御無事で、少しも變らない御樣子は何よりです』

『私は變らないだらうが、吉澤さんは變りましたな。何か御病氣でもやりましたか』

『いや……』と吉澤は淋しく笑つて、

『多勢の家族をかゝへて、貧乏に追はれてゐるものですから』

『で、どちらに』

『新網の裏店にゐて、やる仕事がないものですから、下手なこいつを流してゐるんです。實に面目のない有樣なんで』

と、やり場のない尺八を、ねぢるやうに握つて言つた。

『イヤ結構ですとも。その筆法でいへば、この庄次郎なんぞは、愧死しなければなりませんや。だが、月並でいへば、死んで花實が咲くもんかといふ哲學で、愧死すべきところを、かへつてこの通り、いよ〳〵脂ぎツて肥りましたよ』

『では、なにか、御商業の方でも』

『資本のいらない幇間といふ稼樣ですよ。但し無論、野だいこでありますが』

『ほウ、幇間……?』

『吉澤さん。吉澤さん。さう感心しちや困りますよ。然しまた、かういふ稼業をしてゐると、實に、世の中の裏通りを歩く人ばかりに會ふもので、ツイ四五日前の晩も、ある座敷で、柳橋の小歌さんにバッタリ會つて、いろ〳〵な話を聞かされましたが、その時には、さしもの露八も、貰ひ泣きしてしまひました』

『柳橋の、なんといふ人でしたか』

『小歌……。知りませんか、なか〳〵流行つてゐる妓ですよ』

『知らんですな、そんな人は』

『だつて、あなた方の隊長殿、大谷内龍五郎さんのお嬢様ですが』

『えッ。……ぢや、お歌さん』

『なんでも、その後お茶屋で聞くと、一昨年の秋ごろから、東京で藝妓になつて居らつしやるのださうでして――實にお氣の毒でございますな。それに、四五日前の話では、沼津在にあるお父さんのことで、非常な心配をもつてをりましたよ』

『ぢやその心配ごとを、露八君に話されたのですな』

『男と見込まれて話されたのでせうか、問題が問題で、なんとも、私の智慧には及びさうもない

わけさ』

『聞かしてくれませんか、その話を』

『ぜひ聞いてもらひたい位ですよ。ことにあなたは、彰義隊でも緣故もふかいし、前からの御懇意でもあるから、い〳〵思案がうかぶかも分らない。……だが、往來は、いけませんな。どこか、ちよつとした靜かな料亭でも……』

露八は先に立つて、狹い新道をはいつて行つた。

三

吉澤はその日、露八から、大變なことを耳にした。彼の體は、一刻もじッとしてゐることを許さなかつた。

露八に別れると、彼はすぐに遠近新聞の發行所に、記者と小便を兼務してゐる藤田寛二のところへ駈けつけた。

『藤田、おれたちが知らないまに、金岡開墾地では、大變な問題が起つてをる』

『彰義隊の者にか』

『いや、先生の一身にだ』

『だれに聞いた？』

『それは後で話す。それよりも、事は焦眉の急なのだ』

『もしや、齋藤金左衛門の一件で、御迷惑がかゝつて來たのぢやあるまいか』

『それだよッ藤田。――御迷惑どころぢやない、先生は、自分は片輪で手が下せないから、同輩四十人のために、どうか斬ツてくれと僕等に頼んで、齋藤を目的どほりやつた後、おれたちが金岡を立ち退くと、そのあとで先生は、自分の口から、齋藤を害めたのはかくいふ大谷内だと、誰に向つても信じるやうに話してゐたッていふんだ』

『ふゝむ……道理で、あまり僕等の方に警吏の追及が緩漫すぎると思つてゐたら』

『その筈だ、先生は、自分で罪を負はれてゐるんだもの。しかも、あの晩、おれたち二人に路用といつてくれた四十何圓かの金は、お孃様を東京の藝妓屋へ身をしづめさせた金なんだぞ。その金で、飢ゑてゐる同輩の人たちの窮乏を救つたり、庄屋の債務を返したりしてゐたんだ。……そ、それを、おれも君も、なんにも知らずに貰つて來た』

吉澤は、聲を喉につまらせた。藤田も、うしろを向いて、目をこすッたが、

『そして、どうしたんだ、あとの話は』

『おれたちが斬り捨てゝ來た、齋藤金左衛門には、源六郎といふ息子があるさうだ。なんでも今年十八とかになる……』

『ウム、聞いてゐた』

『それが、君も知つてゐる劍客中條潜藏のところへ行つて、ぜひ、仇を討たしてくれと頼つた。潜藏はあんな人だから、うんと引きうけて、一年ばかり手元へ置いてゐたさうだ。所が、今度正式に、先生の手許へその交渉を運んできたので、先生の方からも、日や場所や、立派に返事を出してしまつた』

『あゝ、そいつはしまッた！　で、日どりや場所は分つてゐるのか』

『場所は沼津の附近らしいが、肝腎の日の方がよく分らない。たゞ、迫つてゐることは事實だらう。――お孃様は、それを中條潜藏の懇意にしてゐる民部省の役人から、ひよつと耳にして、だんだんと知つたといふ話だ。悪くすると、もう過去のことかも知れない』

『とにかく金岡へ行つてみよう。貴様、金があるか』

『無い』

『待つて居給へ。都合してくる』。

吉澤を小使部屋へ殘して、藤田は外へ飛び出して行つたが、やがて、彼を引ツぱり出して、近所の飯屋へくゞると、飯をたべる間に、草鞋を買はせにやつた。

四

大谷内龍五郎の望みで、場所は、臨濟派の寺を借りることになつた。

噂は、仇討といふやうなことばでひろがつたが、嘘である。大谷内には、前からべつな用意があつた。

北向きの狹い座敷であつたが、ひつそりして、梅の香が冷やかに匂ふて來る。大谷内の死の座はそこにしつらへられてあつた。

彼は、安氣になつて、白い席へ坐つた。

立會に來てゐた山岡鐵太郎も、また雜談でもできさうなその樣子をながめて、自分も安心したといふ風に、靜かなことばを、二言三言かはしてゐた。

その席には、寺の住職と、中條潛藏と金左衛門の子源六郎と彰義隊の代表としてたゞひとり小

川椙太の立會をゆるしただけで、そのほかの者は、絶對に入れなかつた。

やがて、何か、潛藏がそばにゐる前髪の源六郎に言ひつけると、彼は、中座して席を外した。

『……』

潛藏が、山岡に目を向けると、彼は、友としての立場で、大谷内にこのよろこびを傳へるのを心うれしく思つた。

『さて、大谷内君、長いあひだ、實にあなたも苦しかつたらうが、決して無駄ではなかつた。やつと、藩廳でも悟るところがあつて、近いうちに、彰義隊殘餘のもの一統に、有難いお沙汰があると極つた。今、お扶持方が、各々の待遇かたを銓考してゐる』

『さうですか。謹んで、お禮を申しあげませう』

『何か、御遺言は』

『ありません。……が、私の死をきくと、來る者があるかも知れません。この寺へ』

『うム』

『吉澤と藤田といふ青年です。もし參つたら、御住持の口からでも結構ですが、かう、申し傳へてください。……大谷内は今日のことがなくても、戊辰の年を境に、當然、生きて來ないがいゝ

人間であつたでせう。どうせ梢から振り落される一葉です。然し、吉澤君や藤田君は、これから先の青年、時勢の先驅でなければならない人。どうか、私の死を誕生期として、明治の世へすゝんでもらひたい。……かう伺言やつてやつて下さい。それだけです。ほかに何もありません』

山岡は、お歌のこともうす〳〵聞いてゐたので、口にまで出かけたが、思ひ直した。

『前もつて、お斷りしておきましたが、源六郎殿に討たれたつもりであるのですから、御介錯はいたゞきません』

約束のごとく、介錯なしでしづかに屠腹して命を終つた。

× × × ×

吉澤と藤田が、駈けつけてきたのは、彼の死後三日目であつた。どう考へても、あきらめるよりほかはない事だつた。

金岡開墾地の小屋は取拂はれて、舊彰義隊の人たちは、靜岡に移された。だが、吉澤と藤田は、

『もう一萬石でも御免だ』

と、東京へ引つ返した。

だが、そんなところが、どこか大谷内の遺鉢をうけてゐるとみえて、二人とも、新聞記者をやつたり、牛鍋屋を出してみたり、横濱へ出て商館に出入してみたりしてゐたが、たいがい二三年で失敗した。

失敗するたびに、二人は妙に、大谷内のことを思ひ出した。

最後に、二人は協同出資で、太田新田で牧畜をやつたが、牛ペストの流行で、牧場の牛をみんな官憲の手で掘井戸へ埋められてしまつた。

結局、世の中はどう行つていゝのか分らないといふ經驗だけを積んで、以來、ふたりとも消息がない。

お歌は、だいぶ露八の哲學にかぶれて、その頃は、ちよつとした荻江の名取になつてゐたといふ。

大藏經開眼

一　堂見の者

幾つも出してある床几の緋手氈を、おくみは一枚々々と取りのけてゆく。そして夕陽の下に、一日の塵を拂ふと、櫻もみぢだの銀杏だのが、もう人影のない蓮華王院の裏のはうへ、切金箔でも吹いたやうに光つて飛んで行く――。

『風邪でもひいたのかしら？……彼の人は』

弓茶屋のおくみは、九之助のことを考へ出しながら軒下へ床几をかさねた。一日でもこゝへ見えない日はない九之助なので、來ればうるさい氣のする時もあつたが、來なければ來ないで何となく物足らなく思ふ。

『……おや何だろ？』

おくみは足もとへ手をのばした。重い麻財布だつた。汚い紐でぐる〳〵と卷いてある。

『まあ……誰が忘れて行つたのかしら？』

一日中の客の顏をゐがいてみたが、けふは殊に客が多かつたのである、財布の姿だけで持主の姿を思ひ當てることは難しかつた。

蓮華王院の西の緣は、三十三間堂といつて、天下の弓場になつてゐる。そこでこの頃、紀州藩の者がさかんに稽古してゐるので、その稽古日といふと、何處の藩ともなく、たくさんな侍たちが見學に來てゐるし、町の者も見に來てゐた。

通し矢の上額を競ふことが、毎年烈しくなつて來たので、この附近には無數に腰かけ茶屋ができた。弓茶屋のおくみも、人にすゝめられて、母親と二人で店を持つたのであるが、すゝめた人の豫言した通り、おくみの容貌はどこの弓茶屋の娘より目立つて、今ではいちばん流行つてゐた。

あれほど流行る茶店だから、二年ほどの間には、相當小金も貯まつたらうといふ者もあるが、實際はさうは行かなかつた。三十三間堂の地内を借りてゐるので、寺へも堂衆たちへも、又、弓場の支配をしてゐる六人の堂見衆といふ――寺社奉行の下役たちへも、いろいろ心づけが要つたりするので、どこの茶店も、忙しい思ひをするだけで、生活はいつぱいと云ふのがほんとの懷中

だつた。

（……誰のにしても、今に氣がついて、落し主が取りに來るであらう）

おくみは、湯沸し場の棚の上へ、金入を上げておいた。

だが――他人の物だし――そこも物騷な氣がしないではない。奥にゐる老母へ預けておくのが安全だと考へたが、まだそこらの掃除だの洗ひ物が殘つてゐたので、自分の帶の間へしまひ直した。

――やつと自分の手足まで拭いて、髪を撫でつけてゐると、蓮華王院のなじみの番僧が、

『おくみさん、片づいたね、おつかれだらう』

『オヤ、淨心さんですか、あなたも御用ずみ？』

『ム。……けふは又、ばかな人出だつたな。稽古日でもかう來るのだから、この年暮の大矢數の日には、たいへんな雜閙だらうよ。儲かるのは、おくみさんばかりだぞ』

『ま……そんなでもございませんわ、ほんとに』

『まあいゝさ、今のうち精々働いておいて、嫁入仕度を拵へておくことだ。さうさう、無駄口を云つてゐると忘れてしまふ。おくみさん、渡しておくぜ』

『……え？　何ですか』

『堂見衆の小牧さんから、おまへに渡してくれと頼まれた手紙だ。小牧さんからも、おくみさんからも、いづれ奢つてもらふつもりだが、けふは默つて渡して行くよ』

二

店を閉めたら、おつ母さんに內密で、ちよつと祇園の二軒茶屋まで顏を貸してくれないか――

手紙を見ると、おくみは、

（どうしよう？）

迷つたが、

（止さう）

と思ひ決められなかつた。

好きな人どころではない――堂見の小牧台八は、何だか怖い人に思はれてゐた。然し――その怖さが、おくみにはまたふしぎな魅力でもあつた。

ならず者が强請に來ても、何か揉め事が起つても、堂見の台八が來てくれれば、おくみも母親

もぼつとして、女ぐらしの中にも氣づよいものがあつた。おくみにとれば、台八といふ者は、魅力といふよりも、頼もしい人と云つたほうが適切かも知れない。

二軒茶屋まで行つてみると、その小牧台八は、神樂門の陰に立つて、待つてゐた。

『來てくれたか』

台八は卅二、三の男だつた。小役人には勿體ないほど骨格もすぐれてゐて、才氣は眉にも見え、唇は大きな意志を貯へてゐるやうに見えた。

『御飯は喰べたのか』

『いゝえ、まだ……』

『ぢやあ、何家かで』

『でも、おつ母さんと一緒に喰べないと、疑はれますから』

『おつ母さんは、まだ二人の氣持をわかつて居てくれないのか』

『氣持つて？……』

『この間もおまへに云つたことさ』

『だつて、あんな事、私の口からは云へませんわ』

『ぢやあ、やつぱりおれの口から話すほかはないな。おれから話さうか』

『待つてください……まだ……もつと先になつて』

『おまへ、迷つてゐるのだらう。——九之助とおれとを較べて』

『さうぢやありませんけれど……。あの、手紙の御用つて、何ですの』

『よさう』

『あら』

『おまへが迷つてゐるなら云へない』

『どうしてです』

『極つてゐるぢやないか、優しくて、金があつて、おれのやうに、嫌な相談などかけない町家の九之助のはうが、よけいに良く見えて來るにちがひない』

『九之助さんと……わたし、べつに何も』

『……ぢやあ、あばよ』

『あ、待つてください。……氣持がわるいぢやありませんか』

『でも、話さないはうが、花だと思ひ直したから』

『お金の事ですか』

『實はな……』

『いろ〳〵お世話にもなつてゐるんですから、出來るほどの事なら』

『ところが、今度はちつと額が大きい。――いつか話したろ、天王寺普請の瓦請負に半口乘つた事を。あいつに注ぎ込んだ金が、年を越さなければ正味になつてもどつて來ないのさ。そこへ生憎と、堂島にすこしばかり買付けてある米が、相場が下つて、後敷金がいると云つて來たのだ。年暮にやあみんな金になつて來るわけだが、そこ迄のつなぎに二百兩ばかり工面したいと思つてゐるのだが』

『小牧さん……私にそんな大きなお金、どうにもならない事は御存じでせう』

『おまへの手にない事は知つてゐるさ。……だが、九之助にひと言いへば、あれや六條坊門で屈指な舊家といはれてゐる佛師屋のせがれだ。それくらゐな才覺はすぐ出來よう』

『……』

『話だ。……何もむりにしてくれと云ふんぢやないぜ。……おれもなあ、男と生れたからには、寺社奉行の下ッ端で、一生安扶持の糊をなめて送つてしまひたくねえからなあ』

『……』

『――と云つて、戰國ぢやなし、槍すぢで野望も持てないし、今更、弓の稽古をして、三十三間堂へ天下一の額を揚げて立身して見せる根氣もねえ。それよりは、金ぢやねえか、金さへ持てば寛文の御時世でも、ずゐぶん男一代のしたい仕事はできるからなあ』

『……』

『おくみ、かう云ふとおまへは、おれを凡の道樂者と見やしないか』

『……いゝえ、あなたの御氣性は、あたしも知つてゐますから』

『わかつてくれりやあ有難い。女あそび、博奕、飲み食、そんな事あおれの慾望をみたすに足りない。おれは町人になつてもいゝから、男として悔いのない一生を送りたいのだ。それは仕事より他にないぢやないか。三十三間堂の堂見役などをして、的場の砂を掃いたり、矢數の帳前に坐つたりする仕事に、何の張合があるものか』

『……小牧さん、あまり遲くなると、おつ母さんが變に思ひますから』

『歸りたいのか』

『……でも』

『いやな事を聞かせて済まなかつたなあ』

『そんな事ありませんけれど……私の力では……』

『もういゝ。忘れてくれ。そこ迄、送つて行つてやらう』

台八は、おくみの手を握つて、自分の懐中へ差しこんだ。

『水仕事をするから、傷々しいほど荒れてゐるなあ。いつ迄、こんな可憐しい手をさせて置きたくないが……』

おくみは顔を横にして俯向いた。その顔を追ふやうに、

『……誰も見てゐやしない。……誰も見てゐやしない！』

台八の唇が、執こく縺つた。

『いけません、いけません……』

逞しい腕から脱けようとする跳きに、おくみは白い喉を伸ばして爭つた。するとその足もとへ、帶のあひだから金入が落ちた。

金の音に、台八は思はず手を放した。汚い麻布の財布から、封金の角でも破れたやうないゝ響きが洩れたので、彼の眼は、驚きと怪しみに、暗い地の上に吸ひつけられた。

一 闇の脈搏

『心配はありませんよおつ母さん。きつと、買物にでも行つたんでせう』

九之助はさう云つて、おくみの母親をなぐさめてゐた。

この母親は中風をわづらつたので、腰こむ程ではないが、手足が儘にならなかつた、九之助はおくみに代つて、その老母のそばへ火消壺を持つて行つてやつたり、水瓶をのぞいて見て、手桶で水を汲みこんだりしてゐた。

『……どこへ行つたのだろ？』

母親をなぐさめてゐた九之助も、心のうちでは氣になつて堪らなかつた。堂見の小牧台八が、おくみへ何んな心を抱いてゐるかといふ事もよく知つてゐるだけに、老母の心配よりも、複雜だつた。

『堂見の者といへば、町方の下役よりも風がわるいからなあ……』

行燈を出して、カチ〳〵火打石を摺つてゐると、炬燵にゐる老母が、

『若旦那、もうそんな事なさらないで下さいまし。勿體なうございます』

『おつ母さん、そんな氣がねはいらない事ですよ、私はこゝの家へ來て、かうして氣儘にさせて貰ふのが樂みなんだ』

『お宅にゐれは、佛師屋の若旦那でいらつしやるのに、何で又こんな汚い家へ來て、そんなに遊ばすのがよいのでございますか』

『私の氣持は、おくみさんが知つてゐてくれるだらうと思ふ。貰をいへば、私の家庭も母が後添だし、腹ちがひの兄弟は多いし、しんから家庭で樂しいと思つたことはないのだからなあ』

云ひかけて、ふと……

『おくみさんが――』

と耳ざとく、台所のはうを振向いた。

『え、え』

元氣のないおくみの返辭が聞えた。

『どうしたのだえ?』

『買物に行つた途中、下駄の緒が切れちまつて……』

『髮の毛も、とはして――』

『轉んでしまつたものですから』

『どこも怪我はしなかつたのか。……おつ母さんが案じてゐたぜ』

『すみません』

『わしも今日は、醍醐まで、お佛像を屆けに行つたので、寄るのが遲くなつてしまつたのさ……これで安心した。ぢや、おつ母さん、お暇いたします』

入れ代りに、すぐ外へ出て、

『……おくみさん、ちよつと』

と、低聲に云つて手招きした。

こつそりと、若い男女が、家の外の暗がりで密やかに語らつてゐる樣子を――中風の老母は炬燵のうへへ顏を横に乘せ、むしろ樂しむかのやうに眼をふさいで默つてゐた。

『……え? え?……おくみさん、何かあつたのだらう。何か心配事があるんぢやないか。顏色がわるいもの』

問ひつめられると、おくみは、九之助の胸へ顏を當てゝすゝり泣いてしまつた。

『九之助さん……あたし、ほんとに悪かつたと思ひます』
『何を云つてゐるんだ、わしはそなたから謝まられる事なんか何もない』
『いゝえ、あなたがこんなに私を思つてくれるのに、私は、わたしは……』
『どうしたのさ、おい』
『ほんとの事をいふと今日までは、迷つてゐました、あなたも親切だけれど……小牧さんも力になる人だと思つて』
『それは當り前ぢやないか。女の大事な岐れ道だもの』
『だけど……もう、もう、迷ひませんわ、わたし。……九之助さん、かんにんしてくれます』
『何う迷はないんだえ？……え？……おくみさん』
『どうつて。わかつてるでせう』
濡れた眼が、生涯を縋つてゐるやうに、九之助の心をふるはせた。
九之助も眼をふさいで――けれど彼女の背にある指先は情熱にをのゝいて、
『ほんとにだね。……欣しい、おくみさん』
『あたしも』

『けれど、おれこそ、おくみさんにさう云はれると辛い事がある。實はね……話してみたんだよ家庭へ』
『ア、わたしの事を』
『すると、おやぢは返辭をしてくれないし、それを聞いたとみえて、後添の母だの、はらちがひの弟たちが、何やかや云ひ出してね』
『九之助さん……わたし一生、こゝで弓茶屋の女をしてゐますわ。……ネ、お家庭へ入れなくても、二人さへ何ならば』
『待つておくれ……暫くの間……一軒持つまでの辛抱を』
『ええ、ええ』
『いぢらしいなあ』
ふたりの頬は、ひたと寄るとすぐ、物に驚いたやうに跳び離れた。
『……誰だろ。……何か店の軒下でごそりと音がしたが？』
臆病な九之助は、もう顔色が變つてゐた。すぐ恐怖と家庭の事が胸の中で一つな動悸になるらしいのである。

そつと、二人は店のはうへ廻つてみた。そこに見出したのは、うす汚い雲水だつた。

乞食の仲間にも見られないやうな破れ衣を着て、軒下の暗い地面をうろうろ見まはしてゐるのだ、そこらに落ちてゐる食物でも嗅ぎ歩いてゐるかのやうに。

二人の跫音に、雲水は腰をのばして振顧つた。まだ老僧といふ程ではない。禪門では若僧と云つてもいゝ四十五、六の年頃なのである。頬骨がたかく、顎も頑丈に張つてゐる顔だつた、ぱらつと生えてゐる髯の中から白い齒が笑つたと思ふと、

『あんた、茶店のお娘だの』

と云つた。

二

おくみは思ひ出した。畫間の客の中に、この顔があつた。

『……忘れ物をしたんぢやがなあ、もしやあんた、取つて置いてくれなかつたぢやらうか』

その雲水が云ふのである。

おくみが、何んな物かと訊ねると、麻地の大きな財布だといふ。そして中には、お金で二百兩、

ほかに青錢や銀子の交じりで、持つにも重いほどな財布だといふ。

『……ヘエ、それは大金でございますね』

すこし疑はしい氣もしたが、坊さんの事だし、朴訥な面ざしが、嘘とも見えない。九之助も一緒になつて、暗い地面を見まはし初めて。

『おくみさん、夕方、腰かけを片づける時に、見えなかつたのかい』

『……い、いゝえ』

おくみは、地上を探さうとしなかつた。枯れた藤棚から洩れる星明りが、彼女の顏にだけ青かつた。

『をかしいなあ……お坊さん、ほかへ落したんぢやないんですか』

『わしも物覺えはよくないが、それでも、けふはこゝより他で出した事はないのぢやから』

『でも、落し物をした時は、得て變な思ひ違ひをしてゐるものですからね。……それとも、落したのは此處でも、何しろ今日は、通し矢の稽古日でしたから、人に拾はれたのかもしれないし』

九之助になぐさめられても、諦めきれないやうに、雲水はおくみの方へ、

『お娘……あんた、御存知なかつたかの』

『……さあ！……あたし』

『疑ふわけではありませぬぞ。氣をわるくしないで下さい。……たゞあれを落しては――二百兩下すつたお方にも、青錢一文いたゞいたお方にも、わしが濟まんのぢや。その衆のお氣持に對してどうも濟まんのぢやよ』

三

九之助は驚いた顏して、

『ぢやあ何ですか……二百兩とやらいふお金も他人からもらつたお金ですか』

『ご覽のとほりな雲水です、御飯すらいたゞいて喰べてゐる體、自分の汗で働いたお金などは一錢も入つてはをりませぬ。それ故に、可惜、無益な人の手に渡つて、あれが意味なく費はれては下すつた人達へ申しわけがないのでおざる』

『……二百兩なんて、そんなお金は、ひとりの人がくれたのぢやないでせう』

『いゝえ、たゞお一人のお方なのぢや。ついきのふの事、わしが何日ものやうに辻へ立ち、自分が年來の大願としてゐる事業のことを、往來の衆へ說いて聞かせ、一紙半錢でも御寄進につかれて欲しいと――一生懸命になつて云ふてをると、誰やら、わしが後へ置いてあつた笠の中へ、雜紙へ無雜作にくるんだ物を拋り入れて行つた者がある』

『それがそのお金だつたのですか――』

『握り飯でもあらうかと思ふてゐたのぢや。ところが、思ひがけない金ぢやつたので、あたりの人に訊ねたが誰も知らぬ。――でも一言お禮を云ひたいがと思ひ、後を追つてやつと探し當てた』

『どうせ偉いお金持でございましたらうなあ』

『なんの、年頃五十ほどの尼さんぢや。わしも意外に思つた、どうして尼などの身で、このやうなお金を無雜作にわしの事業へ投げ與へたかと疑つて――。すると尼は、身の素性も、今の住居も云ふのを嫌つて、たゞこれだけの事を答へて足早に去つてしまつた』

『……』

九之助もおくみも、雲水の話の力に囚はれてしまつたやうに、凝と聞き入つてゐた。

『――尼がいふには、尼といふ貧しい身ではあるなれど、廿幾年の間、生活を質素につゝしみ、糸屑一すぢに迄心をとめて來ました事故、いつか二百兩といふ金にまとまりました。けれど思ふて見れば、自分はたゞ愼しく世を送つて來たといふだけで、世の中へ何を酬ひて來たかと考へる

と、何もして來なかつたのが分つてまことに恥しさにたえないで居たところ、折から御坊の大藏經開版といふ大きなお事業の願望があるのを伺つて、自分で出來なかつた世の中への報恩を、せめてあなたの事業を通して、少しでもお手助ひさせて戴かうと思つて致した事に過ぎません。名も聞かないで下さい、所も聞かないで下さい、御坊もまさか、……おのれの名を、世に揚げる爲にしてゐるお事業ではございますまい。――かうわしの方が一本やられたので、わしはその尼さんの後ろ姿を拜んでゐるほかなかつた』

云ひ終ると、雲水は又、自責にたへないやうに、

『……困つたなら、彼の尼さんの尊い心を落してしまつた。……いやほかの一文半錢にせよ、皆おろそかに出來ぬ人樣のもの、一文でもわしの金ではない。わしは預けられてゐる身だ。……それを』

と、吐息をついた。

九之助は愈〳〵同情して、

『なる程、それでは御自分の金を失くしたよりも辛うございますな』

『つらい、つらい、何とも辛いぞ……』

泣き出しさうに呟きながら、雲水はこゝに諦めをつけても、まだ夜明かし探すつもりであらう、克明に地面を眼で辿りながら、だん〳〵軒先を離れて行つた。

九之助も、歸りを忘れて、雲水と同じやうに屈んで歩きながら、

『お坊さん――いつたいあなたのお事業だと仰つしやつた、大藏經開版といふのは、どんな事業なのですか』

『それは、思ひ立つてからもう十年の餘にもなるのぢや。ひと口では話しきれぬ。こんな時でない時に話さうよ』

――ふと、九之助だけがその時微かな聲を耳にとめた。怪しみながら足を戻して茶店の軒下を見つめたのである。

おくみが其處に泣きくづれてゐた。

弦ひゞき

一

あんなに雲水の探してゐた財布を、おくみは、懷中に持つてゐた。

それを見せられた九之助は、今迄のおくみを見失つたやうに、茫然として淺ましい顏をした。

——だが、それから泣く泣く云ふおくみの氣持を聞くと、九之助は又、以前のおくみを見るよりも、一層つよい情熱と愛しさに囚はれてしまつた。

夕方——堂見の小牧台八から金を無心された時、おくみは生憎、台八にその財布を見つけられてしまひ、台八からかう云はれたのだつた。

(その金は、おれが拾つた事にして、おれが落し主へもどしてやらう)

けれどおくみは、そんな事はできないと云つて斷つた。

拔かりのない台八は、

(ぢやあ、その金とは限らないから、佛師屋の九之助に話して工面してくれるか)

と、迫り直してくる。

何しろおくみは怖かつた。金の顏きばかりでなく、女の體が危險を告げてゐた。

(えゝ、どうですか分りませんが……九之助に話だけはしてみます)

送つてやるといふのを振切つて逃げて來たのである。然し、彼に與へた自分のことばは、きつと證文のやうになつて、履行を迫つて來るにちがひない。もし、仕てやらなければ、この蓮華王

院の地內で商賣してゆけなくなるだらうし、その仇は又、九之助のはうへ祟つて行かないとも云へない。

(どうしよう?)

當惑して家へ歸つて來たところなのだ。九之助の家庭の事情など聞くと、よけいにそんな事は話せなかつた。

そこへ、落し主が來た。

落し主のすがたを見る迄は、おくみは、空想にも懷中の財布のものを何うかう仕ようなどゝは考へてゐなかつたが、今の雲水から、

(——お娘、あんた、こゝらでそんな物を見なかつたかの?)

さう訊かれた時、どうした彈みだらうか——彈みと云つてはをかしいが、さう云ふ以外に適當なことばのないほど迅速な——そして複雜な心のうごきが、思はず、

(いゝえ……そのやうな物は、わたしちつとも)

と、見た事もないやうに、彼女の顏を橫に振らせてしまつたのである。

雲水が地面をさがしてゐると、おくみは自分の胸をのぞかれてゐる氣がした。痛いやうに動悸

が打つ。――けれど、こゝさへ眼をつぶつてしまへば……そしてこれ限りあの堂見の台八が、二度と無理を云はないやうになれば――

『九之助さん……二人がこれで助かると思つてあたし……悪い事は充分知つてゐましたけれど、……凝と、凝と、良心をしめ殺してゐたんです。……だけど、あのお坊さんの云つてゐる事や、眞心から歎いてゐる様子を見たら、わたしはもう、持つてゐられなくなつてしまつた。お坊さんの話した尼さんの事を考へても、濟まないと思つて』

おくみは、さう云つて、汚い麻の財布を前に投げ出して泣き入るのだつた。

二

『オーイ、お坊さあん』

九之助は、重い財布をふところに抑へながら、眞っ暗な闇へ呼んだ。

もう、雲水の影は見あたらない。

彼は又、駈け出して、

『お坊ウさあん……』

祇園林のあたり迄來て、さらに大きな聲で四方へ呼んでみた。

『おゝウいつ……雲水さん！……』

すると、

『おゝウいつ』

と、谺のやう答へがした。

暫く經つて、跫音が近づいて來た。九之助が財布を出して、

『あなたが行つてしまつてから後で、何氣なく横の芥捨て場を見たら、そこの落葉の中にこれがあつた。これぢやありませんか』

嘘を云はないわけに行かなかつた。然し、雲水は欣んで眼に涙を泛べないばかりだつた。これも御佛の光といふものである。決して、私のものではないが、私からこの通りにお禮を云ふと云つて、數珠を出して、九之助のすがたへ禮拜をした。

嘘を云つて渡した九之助は、逃げるやうに戻つて來た。おくみは、家のそばを離れて、心配さうに、木蔭に立つて待つてゐた。

『欣んだぞ、おまへ』

九之助は、雲水の欣び方へ、自分の感激も加へて話した。

『いゝ事をした！　ほんとにいゝ事をしたよ。もしあのまゝおまへが默つてゐたら、二人は行末いゝ事にはならなかつたらう。わしだつて、おまへが嫌ひになつたかも知れないからな』

『九之助さん……わたしをそんな心の女と思はないで下さい。……ね、ね』

『わかつてゐる。おまへがそれ迄、二人の行末に、苦勞してゐたかと思ふと、わしは一層、おまへが愛しくなつた。……いゝよ！　心配しないがいゝ、すこしわしにも考へがあるから、二百兩なんて出來ないかも知れないけれど、金ですむ事だ、出來るだけの事をして、台八から一札取つてしまふよ』

『でも、そんな大金を』

『なに、おまへは、心配しないがいゝ。その代りに、さうした後は、もう台八がおまへへ指もささないやうにしなければならない』

何日といふ事は九之助も云ひ斷らなかつたが、ひどく昂奮した樣子で、別れ際にも、おくみの唇に痛い情熱を殘して、急に遲くなつた時刻をつぶやきながら歸つて行つた。

三

ぶらりと、床几へ寄ると、

『おくみ、茶のみ茶碗で、そつと冷酒を一杯くれないか』

これが、台八のいつもの癖だつた。それを飲んでしまふと、

『おまへのおふくろは、おれが嫌ひらしい。九之助へおまへを嫁りたがつてゐるのが眼に見えてゐる。だからわざと此頃は顏を見せない事にしてゐるが、小牧台八も、そんな捨てた男ぢやないと云ふがいゝ。よろしく云つてくれ』

そんな嫌味を云つて歸つてしまふ。

ふしぎに、金の事は、あれ以後何も云はないのだつた。

けれど九之助は、

『いゝや、どうしても、あの金だけはくれてやる。そのはうが、後腐れが無いといふものだ』

と、口癖に云つてゐた。

けれど、口癖にそれを聞くほど、なか〳〵金は出來ない樣子だつた。たゞ、彼の姿は、降つて

も照つても、必ず此家の奥へ來てゐるか、店頭で立ち話をして歸るか――とにかく一日でも來ない日はない。

台八といふ者を强く意識してからは、その足數も、前より繁くなつて、朝に見え晝に見え、又晩にも來るやうな日があつた。

さうなると、おくみは又、

（この人、こんな事ばかりしてゐて、家のはうはいゝのかしら？）

と、彼の商賣や家庭の納まりを案じてみたり、ひいては、ふたりの理想に迄、不安を感じたりして、戀がおもしろくなくなつて來る。

今のおくみといふ者は、とにかく、弱い母親をかゝへ、細い腕で働いてゐるのである。朝から晩まで働いてゐる彼女の氣持には、顏を見せると、たゞ優しい事ばかり云つたり、中風の母親のゐる炬燵蒲團の中へ入つて、晝間から老母と話をあはせてゐる九之助のすがたが、時々、焦れつたくつて、何だか、ほんとの男性といふものでないやうな氣持さへ持たされてしまふ。

店の忙しさに、眼のまはる思ひをして冬日の晝も、汗ばんでゐるやうな所へ來て、

『この頃も、台八は來るかい』

などゝ人前もなく囁かれたりすると、おくみはつい、

『えゝ、よく來て下さるわ』

と、氣持にもない事を、ぞんざいに云つてしまふやうな事もあつた。

『今に、金を捧へたら』

と云ひ譯のやうにいふことばも、おくみは聞き飽いた。その事で何日かも、

『あんな金の事なら、小牧さんはもう忘れたやうな顏してゐるから、捧へるに及びませんよ。……彼の人つて、ほんとに、さつぱりしてゐるやうな、肚の深いやうな、何だか分らないところがある人なんだから……』

さうおくみが云ふと、九之助は耳たぶを少し赤くして、

『いやいけない。あの台八が、忘れてなんかゐるものか。あの金だけは、どんな事したつて、わしが作る。……その代り以後、おまへと口もきいて貰ひたくないものだ』

と、母親には二人とも內密にしてゐる約束なのに、その母親のゐるところで、ひどく力をいれて云つた。

四

『やあ、ひどい事だ。けふばかりは、おれたち堂見役の者も、みんなへト〳〵だ』

豪快な笑ひ顔を汗に光らせて、小牧台八は、おくみの床几へ、息抜きに脱けて來た。

十二月の押つまつた日で——それも今はもう夜半の丑刻を過ぎてゐる。

然し——三十三間堂を中心に、蓮華王院の境内は、松薪の篝火と、無數の高張提灯と、小提灯と、そこ此處の焚火と、百目蠟燭と——あらゆる火光をもつて明々と彩られてゐた。

人は、充満してゐた。

その群集は、竹の柵で、二つの波に區別されて動いてゐる。

矢來の中には、この朝の六ツ刻から、翌る朝の六ツ刻まで——正味二十四時間の大矢數を射通す紀州家の射手——和佐大八郎といふ若者が、絶え間なく、矢弦を鳴らしてゐるのである。

一射の空氣が鳴るごとに、芝旌の者が、旌を振つて、中りとか外れとかの送り聲を、的場から戻して來る。

矢拾ひの者、帳前の者、掲示の者——ひとりの射手に對して、無數の人員が働いてゐた。

二、三年前には、尾州家の星野勘左衛門といふ者が、十二刻（廿四時間）に、

——一萬五百四十二射

を放つて、通し矢八千の記錄をあげてゐるのである。

その記錄を破ると名乘つて今年立つたのが、紀州家の和佐大八郎で、もう、今朝から射つゞけて、一萬餘の前の記錄に近づかうとしつゝある。

——わあ……ああ。

——わああつ。

といふ群集の聲が時々どよめいて來て、東山が大きな谺につゝまれる。千射ごとに、

——通し矢何本

——外れ矢何本

と、板へ書いた掲示が、三十三間堂の縁の上から打ち振られて、それが矢來の外の群集までを、昂奮の暴風に卷きこむからであつた。

『——帳面をつけながら、辨當を食つたはいゝが、水も呑めやせん。まだ夜明けまでこの體を持たせなければならんから、ちよつと、同役に代つてもらつて脱けて來たのだ。……おくみ、水を

いつぱいくれないか、水を』

『水でいゝんですか』

おくみも、昂奮につゝまれてゐる一人だつた。

『あるか、いつものが』

『取つておいたんですよ、きつとあなたが來やしないかと思つて』

『ありがたい。冷酒ならばなほ結構――』

二合も入るかと思ふ茶碗のそれを、一息にのんで――

『うまかつた！』

と、眞つ白な息を吐く。

おくみは、自分の胸も、一緒に下がるやうに見てゐた。

『おや、おまへ、いつの間にか仕立てゝ着てゐるな。――おれが買つてやつた着物ぢや氣に入るまいと思つてゐたが』

『お禮もいはないで』

『禮など……。着てもらへばそれで欣しい。……さうだおくみ、おれが店を見てゐてやるから、

ちよつと、見物して來たらどうだ。まづ、前代未聞といつていゝ。紀州家の今度の射手は、まだわづか十九歳だといふ。――何しろ見事なものだ。行つて來い、ちよつと』

『あたしも朝から、ちよつとでも、拜見させて戴きたいと思つてゐたんですけれど』

『西の矢來口から入れ、あそこに同役の倉島がをるから』

『ぢやあ、ちよつと行つて來ようかしら』

おくみは、奥を氣がねしてゐるらしかつたが、すさまじい歡呼と、そこの坩堝みたいな火のいろに引き込まれるやうに、ついと、小走りに駈けて行つた。

五

おくみは人を掻分けて前へ出て行つた。それが侍であらうが、貫人であらうが、考へてゐられなかつた。

射手の和佐大八郎といふ人が見えた。眼の血ばしつた顔を盛つてゐる紀州藩の棧敷も見えた。

尾州家の幕も――公卿たちの居る席も、役人の場所も。

（よくやる！）

と云つて、泣いてゐる者すらある。それが侍なのだ。

人々が歡呼をあげると、おくみも一緒になつて歡呼をあげてゐた。弓茶屋のおくみも聲援に來てゐるぞと眼交ぜに云つて、侍たちの眼がしきりと彼女のはうにそゝがれてゐたのも知らない。

おくみの眼にはたゞ、無數の男性の顏だけが映つてゐた。今度の弓の手が何うとか、矢うなりの吉凶とか、そんな感覺はないのである。——たゞ彼女の眸は、男性の顏で充溢してゐた。

どれ一つとして、この中に、男性らしくない顏はなかつた。

『……あ、あんまり遲くなつては』

氣がついた時は、もう東山のうしろの空が、夜明けに近づいたことを告げて、ほんのり白みかけてゐた。

あわてゝ茶屋へ戻つて來た。

『——あら、小牧さんは』

店には、誰もゐなかつた。あまり遲くなつたので、台八は、役目の場所へ歸つたにちがひない——と思ひながら、

『九之助さんはまだ居るの？……』

奥をのぞくと、中風の母親は横になつてゐたが、九之助は、消えかけてゐる行燈のそばに坐つて、炬燵の中へ憂鬱さうに手をさし入れてゐた。

『……まだ居たけれど、もう歸るよ』

『たれも、歸れと云やしませんのに……』

『通し矢を觀に行くと家を出て來たのだし、もう夜も明けたからね』

『さうですか』

『こんな時でもなければ、おまへと晝から明日の朝まで一緒に居る折はないと思つて、樂みにして來たんだが、たうとう、おまへと口一つきかないでしまつたなあ』

『むりでせう、そんな事を云つても。——きのふからの忙しさを見てゐるぢやありませんか』

『……おくみ！』

元氣なく草履をはいて、軒先へ出てから振向いて九之助が云つた。

『なんです』

『こ、三日うちに、おれはきつと、あれを拵へてくるぞ』

『あれつて？……』

『金を！』

九之助は何か決心したやうにさう云つて歸つて行つた。

求めたるもの

一

甚輩王院の廣間では、百目蠟燭の燭台がぐら〳〵うごいてゐた。

『行かうおいつ。――寺で酒をのんだつてしんから醉えやせん。六條柳町とのして行かう』

『ばか、醉つとるぢやないか』

『いやならよせ。おい、そつちの親友、起てよ、起てよ』

『行くのか、何うしても』

『小牧、貴樣も來い』

『はゝゝゝ』

『嫌なやつだなあ、もう思ひ出して笑つてゐやがる』

『あぶない、足もとに眼をつけんか、銚子を穿いて歩いてゆく氣か』

『殘り酒ぐらゐ、疊へも振舞つてつかはせ。此寺の疊などは、しぶ茶の味よりほかに知るまい』

十四、五人の堂見の者が、飲んでの揚句が、かうなつたのである。

望みどほり、尾州家の記錄を破つて、家中から通し矢天下一の名譽の者を出した紀州から、帳前、芝旃、掲示、矢世話の役などをつとめた寺社奉行配下の堂見たちへ、

――酒肴。

と金一封が出たので、それがこの始末となつたわけ。

首と首と、手と手とを絡み合つて、醉つぱらひ共が山門を出てゆくと、

『小牧さん、小牧さん……ちよつと』

番僧が後から呼びかけて來て、彼をとらへて何か囁いてゐた。

『――オウイ、小牧、何しとるかつ』

すると、石段の下で同僚がわめき出した。

台八は、そこから、

『――先へ行け、後から行くから』

『いや待つてる！　逃げようとてさうはゆかんぞ』

台八は、舌打しながら、番僧へ向つて、

『……何處へ來てゐるのだ、そのおくみは』

『西門の小玄關へ來て立つてをります。――何か折入つて、あなたにお目にかゝりたいのだと申して』

『――折の惡い時に』

と考へて――。

急に懷中へ手を突つこみ、番僧の手へ金を握らせながら、耳へ口を寄せた。

『すまないが……何處か離れた所に、空いてゐる間はないか。そこへおくみを待たせておいて貰ひたいが』

『そして、あなたは』

『醉つぱらひ共を撒いて、すぐに歸つてくる』

『ぢや、西門からお入りになつて下さい。そして、渡り廊下の端れにある離室へおくみさんを待たせて置きますから』

『部屋ちがひすると、飛んでもない事になるが』

『渡り廊下の先は、二間しかありません。夜は廊下の錠口も締まつてゐますから、お間違へになる筈はありませんが、念のため、緣の戸を二寸ほど隙かしておきませう』

『ぢやあ、賴む』

と、小牧台八は、又何か呶鳴つてゐる友達へ答へながら、石段を駈け下りて行つた。

二

火桶を一つ與へられたきりである、その火桶のふちが氷のやうに冷たいし、乏しい炭火では、白い灰も溫もりさうにもない。

おくみは、方丈行燈といふ朱ぼねの大きな明りの側から遠く離れて坐つてゐた。

廿疊もある部屋だつた、金箔の剝げてゐる繪ぶすまの隣りの寒さまでがしん〳〵とわかる。

……自分の白い息を見ながら、そして眸をうつろにして。

（今夜きりで、自分の身も決まるのだ）

と思ふ。

ようく考へてみると、こゝへ坐る迄は、まだ二つの道に迷つてゐる自分であつた。

（九之助さんは、男らしくないし、男らしい氣のする彼の人は肚がわからないし……）

と、そんなふうに。

だが、その男らしくないと思つてゐた九之助が、急に、積極的になつて、今夜は自分がもどるのを、いつもの炬燵で、自分の母親と二人して待つてゐるのだ。やはり九之助には、焦れつたいやうな柔弱と世間に弱い所もあるが、自分に對しては、眞實なのだ。

（――眞實へ身をまかせよう。後でどう生活に困つても、それがしまひには、女のいちばん幸福になるかも知れない）

さうも思ひ――又、

（小牧さんにだつて、眞實のないことはない。男らしい男といふものは、心のうちで思つても、それを表情に出さないものだとよく云ふから――）

なほまだ、こゝへ坐つてゐる時が長ければ長い程、おくみの心には、家へ捨てゝきた考へが又、横絲になつて織れてくる。

（誰かいつか、店の床几で話してゐた事がある。さうだ、弓を射に來た若いお武家たちだつた。――女といふものは、どんな良人を持つたがいゝか、自分で見分けのつかない盲だと。――そして又こんな事も云つた。――女なんて愚にもつかないものだ。何でも自分の眼や耳にわかるやうな愛撫を示してやれば歡んでゐる。だから男を見損ふのだ。ほんとの男性といふものはそんな愚にもつかない女の相手に日を暮してはゐない。女のそばにゐて戀を語つてゐれば、その間だけが女に與へてやつてゐる時間だ。一歩世の中へ出れば、たつた今會つて來た女の事なども、頭の隅へ押しつけてしまふか、頭の中から拋り出してしまつて、敢然と、仕事に當つてゆくのがほんとの男性といふものなのだ。それが純粹の男の性格といふものなのだ。男が、心も體もすべて燃やしてしまふものは、色戀なんかぢやない、事業だ、世をうごかす、末代まで殘るやうな事業だ。――たとへば、三十三間堂に、天下一の額を掲げて、死後まで、われこゝに在りといふ事を殘してゆく事だつて、色戀以上になるぢやないか。色戀なんて、男は片手でするのも勿體ない、小指の先でしてゐると思へばいゝんだ……などゝ）

おくみは、そこにも何か、ほんとの事があるやうな氣がするのだつた。さういふ考へのわいた時、九之助の事を思ひ出すと、何かしらもう行末まで分り切つてゐるやうな氣がして、自分の若さを葬はれてゐるやうな氣持に沈んでしまふ。

『――寒いなあ、此室は』

いきなり後で無遠慮な聲がきこえた。戸を開けたらうに、おくみは入つて來る者の跫音にさへ氣がつかないでゐたらしい。はつと胸が急につまつて、

『――まあ』

意味のない返辭をしながら、火桶のそばを少し離れた。

台八の體に持つてゐる酒のにほひが、この室のひんやりした抹香の空氣を遽かに搔きみだしてゐる。大きな刀を大小とも後へおき、

『さびしかつたろ』

火桶をおくみの膝へ押して來て、すぐ打ち解けてくる。

『ええ、ずゐぶん靜かですことね、お寺の夜といふものは』

『誰も來ない部屋ださうだ』

煙草入を出してすひつけながら、台八は、いきなり云つた。

『おくみ、おまへの來た用事をあてゝみようか』

『……實は、あの』

『まあ待て、おれが先に云はう。――九之助が金を拵へて來たのだらう、それをおれに渡して、

借用證文はいらない代りに、以後、おくみには一切かまつてくれるなといふ一札を貰つて來いと云はれて來たらう』

『……』

『おまへの、おふくろは、九之助へ手をあはさないばかりにして、この娘の行末をたのみますと云つたに違ひない』

『……』

『はゝゝゝ。……待つてゐるのか九之助は、おまへの家に』

おくみは、骨ぶしがふるへて來た。そのくせ顏は熱くなつて、何う答へていゝかわからない。

『……小牧さん、あなた、どうしてそんな事まで知つてゐるんですか』

『わかるさ。祇園の神樂門へおまへを呼び出して、首尾よくおまへに突つぱねられた晩からの事ぢやないか。――あの晩の事だけ闇に立つて聞いてゐても、それくらゐな成行きは見當がつく。……ところで幾額持つて來たのか』

『あなたの云つたより少いから……私、どう云はれるか知れないと斷つて來ましたけれど、九之助さんが、とにかく一生懸命で、八十兩だけこしらへて來てくれたのでございます。……小牧さ

ん、わたしを可哀さうだと思つてこれだけで、もう何も文句のない事にしてくださいませんか』

『いらねえ！』

『え……』

『いらねえよ、そんなもなあ。あの時は一時工面に困つたが、おれは小役人こそしてゐるが、さう年中ぴい〳〵してゐるやうな男ぢやない。それに、借りてくれと云つた覺えはあるが、金をくれとせびツた覺えはおれにはないぞ。見下げるなつ』

『……怒つたんですか。小牧さん。そんな惡氣で持つて來たわけではありません。たゞ、これから先も、永い事、お世話にならなければ此處で商賣はしてゆけませんから』

『ぢやあ賄賂か。賄賂ならもちつと上役へお供へするのが本筋だ。堂見の者なんぞは、稀々、安酒でも飲ましてやれば他愛なく欣んでしまふ。——八十兩なんていふ金を、どういふ理由でこのおれに九之助が持つて寄來さしたか。しかもあの氣の小さな九之助が——』

『さう云つては、根も葉もないぢやありませんか。何にも云はずに、納めておいてください、九之助さんもこれを作るには、どんなに永い間かゝつたか知れないんですから』

『おまへがそれ程にたのむなら……。よし、取つておいてやらう』

『ぢやあ、受取つて下さいますか』

『ウム……。だが待て』

帶の間からおくみが金を出しかけるのをかう止めて、

『貰つておいてやるが——その金はおまへが持つてゐるがいゝ』

『でも、それでは』

『いゝぢやねえか、どうせ二人で費ふ金だ』

『え？』

『八十兩あれば、江戸へ出て、當座のしのぎと、一商賣の資本にはなる。……おくみ、おめえにも、これからはもちつと面白い世の中の味を敎へてやらうぜ』

『……』

『何をびつくりしてゐるのだ。おい、明りを消してしまへ』

『……わたし……わたしもう……』

『歸る氣か』

『……』

おくみは動けなかつた。

台八は側へ寄つて來た。手が觸れてくる迄おくみは竦んでゐたが、行燈の消されたとたんに彼女の反抗は必死になつた。けれどその力は徒らに自分を熱してしまふに過ぎない。口惜しさに台八の顏といはず自分の肌といはず搔きむしつて、暴風の中で灯りを求めるやうに理性を呼びつづけたが、こゝへ來たことがおくみの過誤であつた。

大藏經開版

一

春の雪と云つては感じがちがふ程な降り方であつた。松がとれたばかりの一月の町を、雪は横なぐりに鳴つて降る。

東山も北山も――たゞ加茂川だけが青かつたが、それも水脈だけで、河原は白い、橋も白い、馬までが眞つ白になつて、雪の小路にいないゝてゐた。

（死ぬと覺悟した者が、何で町へ喰べ物を漁りに來たのだ。……もし家庭の者か、知り人に見つけられたらよい恥搔き……。あゝどうしてわしはかう馬鹿だらう）

九之助は、ぼんやり加茂の岸に立つた。被つてゐる菰は凍つてゐるので突つ張つてゐた。伸びた髮にも眉にも雪がたかる。

もつともつと、この雪が降らないものかと彼は思ふ。かうして歩いてゐるまゝ雪の中に埋まつてしまひたいと思ふ。

（氷の底は、青々といつもの水が流れてゐる。死ねない事もないなあ）

どんな物象も、彼のひとみには今、死の手段につかふ事のほかに見られなかつた。そのくせもう、十幾日も死の門口にうろ〳〵してゐた。

（今夜こそ）

と決めてかゝつた晩でも、その瞬間に、針ほどな未練でもひらめくと、もう氣が鈍つてしまふのである。――おくみの事、老父の事、緣者の誰彼の事――常には思ひ出しもしない幼な友達のことまでが、未練の端になつてくるし、複雜でたゞ厭しかつた家庭の異母弟までが、慕かしいし、そこの夕餉の灯など思ふと、憶々として、わが家の味噌汁のにほひまでが空想される。

――だが、後の家庭も、それどころではないだらうと又思ひ遣られて來る。年暮に迫つた金を八十兩も持ち出したのである。それも外の金まで集めてだつた。どんなに彼の老父は驚いたらう

一夜で白髪になつてゐるかもしれない。又あの後添の母や異母弟たちは、口を極めて、自分を罵つてゐるだらう。いや縁者も、とくい先も、近所の者も……と考へて來ると、九之助は、狂はしくなつて、脚がひとりでに駈け出したくなつた。

（持つて行つてくれ！　冥途の鬼！　わしを無間へ突き墜してくれ！）

小牧台八とおくみを恨んでやる勇氣すら枯れてゐた。

この正月には、もうあそこの境内に、弓茶屋は一軒減つてゐた。堂見の台八と弓茶屋のおくみが駈け落ちしたといふ評判も、年暮の三十三間堂のうはさよりもあの界隈では取り汰沙されてゐる。

おくみの母親は、遠縁の者へ引き取られて行つて、九之助に對しては、ただ泣いて詫びる事のほかはなかつた。九之助が得たものは、結局、中風の老母の涙しかなかつた。

（死にたい、死にたい。――何も慾はないから、死ねる勇氣が欲しい）

九之助は、川に沿つて歩いてゐた。かうしてゐる間にも、ふとその勇氣が出ようかと思つた――。

大事だ、殆ど人は歩いてゐない。白い夜と云つてもよい天地である。こんな日に死ななければ、

愈々死ぬ日はないやうな氣がする。

（さうだ、あの橋から）

深い所を、九之助は何度ものぞいて知つてゐる。そこは三條大橋。

その大橋の袂まで彼の來た時である。九之助はふと足を止めた。自分の前に立つてゐる柳の切株かと思はれるやうなものが二、三尺横へ動いたからだつた。

『おや、人間だ』

さう驚くほど、その人間は、雪とけぢめがつかないのみならず、凝と、强情な姿勢を持つて、吹きなぐつて來る風雪にも、まるで無感覺な樣子である。

今――横へ少し動いたのは、脚もとを埋めてくる雪が餘り高くなつた爲らしい。後からではよく分らないが、頭は頭巾で卷いてをり、黑い法衣を着、手甲脚絆に頭陀ぶくろを掛けてゐて――禪家の雲水であることだけは間違ひない。

『……はてな？』

九之助は小首をかしげた。

『――さうだ、いつか弓茶屋へ、落した財布を探しに來たあの雲水――』

さう思ひ出すと、彼は、今自分の持つてゐる世の中の範圍で、たつた一人の知己に巡り會つたやうな懐しさを覺えた。

東山や市中や北山や、この都會に數かぎりなく聳えてゐる堂塔佛舍も、彼には無緣な物に過ぎなかつた。黄金の佛陀も他人の冷たい顔と變らなかつた。——けれど今、雪の中に埋まつて立つてゐる見窶らしい沙門の姿を見出すと、その破れ衣の下には、何かしら自分の訴へを聞いてくれさうな溫い血があるやうに思はれたのである。

（この人に訊いてみよう！　死ぬ道を）

九之助は、ぶる〳〵體が顫へてきた。それは欣びとも何ともつかない不思議な歡喜であつた。

（いや、佛の道は、生死の決定とやらを教へてくれるものだといふ。死ぬ道も訊きたいが、或はわしのやうな者にも、生きる道を悟して下さるかも知れない）

かういふ考へが閃くと、天地の雪がすべて光つた。九之助は、雲水のそばへ寄りかけた。

——するとその時、雲水も急に駈け出してゐた。

先刻からその儘、凍死してゐるのではないかと思はれる程、凝と、動かずにゐた雲水の足もとから、眞つ白な粉雪が立つと、姿も雪風に攫はれて行くかのやうに。

『お武家様つ。——暫し、暫しのあひだ、お待ち下さいませつ』

手を上げつゝ、彼方へ走つて行くのであつた。

『……？』

九之助は、ぽかんとした眼を、向け變へた。

見ると、その時、一頭の駒がふゞきを衝いて、三條大橋の橋口まで來てゐた。駒の上には、金紋の陣笠を俯伏せに見せた侍が跨がつてゐたが、突然、力のこもつた大聲で呼びかけられたので、思はず駒足を制したのであらう、振顧りざま、

『——何かつ？』

と、手綱をつめて鋭く云つた。

二

雪の中に手をついて、雲水は馬上の侍へ嘆願してゐた。

『これは大藏經開版の聖願を立て、その資金勸化のため、大方の諸衆に縋つて、一紙半錢の行乞を賜うてあるく一沙門にござります。——御用ばしあつてお通りの途上、おひき止め申して重々

おそれいりますが、何とぞ、いか程なりとも御喜捨たまはりませ！　御喜捨たまはりませ！』

『――何ぢやと？』

武士は、憤つとしたやうに、陣笠の陰から睨めすゑ、

『大蔵経がどうしたと云ふのか。この雪中に武士の駒を止めて、押しぶとい物乞ひめ！　退きをらう』

『お腹立ちでございましたら御勘辨くださいませ。實申しますと、先頃からすこし風邪に冒され今日は、今年になつて初めて勸化に出たのでおざる。――本年第一日の行乞、あはれ、大業の新年第一歩に、幸あれかしと念じながら、朝より路傍に立つてをりましたが、いかにせむこの風雪にて、通る人も稀れなり、時折に行く人あるかと思へば皆、拙僧の說くことなどには耳をもかさず、又その餘裕もない日稼ぎ人ばかりでござる。――折から御馬上のおすがたを拜し、これなむ、佛縁のお人、新年第一番の御加力をたまはらんものと、敢ておすがり申しあげる次第でおざる。――おねがひ申しまする、お袖の端、半錢の喜捨なりとも』

『――撲るぞつ』

武士は鞭を振りあげて怒つた。

『この坊主めが、それがしを今年の袖乞ひの辻占のやうに吐かしをる。この寒さに、いやこの忙しい世の中に、長々と路傍の泣き言まで聞いてはをれぬ。――退けつ、蹴つぶすぞ。』

『――あつ。』

躍る蹄の雪を浴びながら、雲水は駒の横へ迫つて、武家のあぶみに縋つた。

『――新しい年の初めに、よき人の慈悲が欲しいのでおざる。お慈悲を強ひるも異なものにござりますが、あなた様が、ことしの一番初めにお縋り申すお方、あなた様のお慈悲は、わたくしの今年の働きに大きな勇氣を與へてくださるものでございます』

『うるさい、うるさいつ』

『こゝで、わたくしが挫けては、ことしの勸化の信念に少しなりとも弱い心を抱くかもしれません。そんな事では、大蔵経開版といふやうな大業を成就することは所詮おぼつかないので御座ります。――御迷惑さまながら、以上のやうな信念をもつて、わたくしはお叱りをうけてもあなた様の菩提心にお訴へいたしまする。――御喜捨をたまはりませ！』

『くれてやるツ』

ぴゆつと、鞭が下つた。

雲水は、どこかを打ちすゑられたとみえ、雪の中へ仰向けさまに轉がつた。

もちろん騎馬の武家は、とたんに駒足を早めて、三條大橋を東へ向つて、見向きもせず飛ばしてゐたのである。

猛然と、雲水は剝ね起きた。

起ると共に、

『お武家様つ、おさむらひ様つ――暫らくつ……暫らくつ……』

雪を蹴つて、追ひかけて行くのだつた。

横ざまに吹く幅のひろい川風は、そのしや嗄れた聲と姿とを撲るやうに打つて、濛々と、目も霞むやうな白魔の天地を描いてゐる。

九之助も、その雪かぜに捲き込まれながら、

『――アツ、アツ、追ひかけて行つた。ふしぎなお坊さんだ、自分の金でもないものを――いつかの晩も云つてゐたのに――それをあんなにも一心になつて？』

ひよろ〳〵してゐる彼のからだは、烈しい雪と風壓に背中から押されて、大橋の上をうつゝに蹌けて行つた。

『さうだ！……彼の坊おさんよりほかに、わしの行く道を訊く人はない。彼の人を見失つてはならない！』

九之助の眼に、たつた一つの或物がこの時見えた。それが何であるかは彼にも分らないのであるが、體ぢうの血潮の流れは、彼の血管の中でせつなに向きを變へてゐた。そして、一瞬前の九之助とは人間がちがつたやうな勢で、彼も又、騎馬の人を追つてゆく雲水の後から、雲水と同じやうな勇氣を起して追つて行つた。

三

――五町、十町、十五町、二十町。

騎馬の影は止まらない。

蹴上の坂あたりで一度雲水は追ひついたが、

『ぶ禮者つ』

一鞭の下に、雲水のすがたは、大きな雪塊のやうに大地へまろび、駒の蹄から捨てられてゐた

それでも、雲水は屈しる氣色もなかつた。なほもしや嗄れた聲を勵ましして、先刻述べた意味の